〔資料と解説〕

一九世紀初頭東北農村の肝入日記

―「文化二年　乙丑日記」―

千葉　明夫*
高木　正朗**

はじめに

江戸時代以来の伝統と領域をもつ日本のムラの多くには，検地帳，名寄帳に代表される土地資料や宗門改帳，人別改帳に代表される世帯資料が保存されてきており，近世初頭ないし中期以降のムラの経済・社会・人口構造などを数量的に把握するための基礎資料となってきた。われわれもこうした資料を利用してきたが，それらによって彼らの行動のすべてを説明できるわけでは必ずしもない。なるほど生活の下部構造をなす農民の土地所有（耕作規模）とその変化，その帰結としてのムラや地域の階級・階層構成の変化，耕作主体である世帯・家族の構成と変動サイクル，出生，死亡，移動による人口構造の変動などを解明することは重要であり，その意義は今後も変わらないであろう。けれども，彼らが実際にどのような生活世界に生きていたのかということも，それに劣らず重要で興味のある研究対象であろう。数量的データを解釈したり，それらを農民生活の全体的文脈のなかに位置づけて考察を深めるためには，「顔」のみえる庶民のその日常行動に注目し，そこから推測できる彼らの意識，感情，動機を知ろうとすることは，決して無駄な試みではなかろう。例えば，大量の奉公契約文書が資料として利用できるからといって，奉公人たちが年季をつとめあげたか否かはわからないし，奉公人請状から精勤者と懈怠者を区別をすることはできないであろう。後にみるように，「日記」は彼らの素顔を垣間見させてくれるのである。

ここに紹介する「文化二年乙丑（きのとうし）日記」（一八〇五年）は，陸奥国の仙台藩東磐井郡増沢村の肝入・菅原俊治（四二歳）が綴った，家業，家人，奉公人，公務，その他にかかわる一年間の記録であり，岩手県東磐井郡藤沢町・岩山赳夫家の所蔵文書である。文化二年は八月が閏月で一三ヶ月，日数にして三八三日あった。当初，われわれはこの「乙丑日記」（以下，単に「日記」と表記する）をできるだけ正確に解読することを目指した。しかし，読み解くにつれて，次第にその豊かな情報に気づかされていった。要約的にいえば，一肝入の目をとおして記録された極めて簡潔な日記であるが，一年間をとおして通読してみると，今からおよそ二〇〇年前の東北地方の豪農の生活や人びとの様子が，実に生きいきと記されているのである。もちろん複数の資料を利用した詳細な生活復元（例えば，信濃国諏訪郡の坂本家の「金銀出入帳」「大福帳」「耕作日記帳」を利用した，渡辺尚志『江戸時代の村人たち』山川出版社，一九九七年，一章，六章など）には及ばないが，それでもここから入手できる情報は貴重であり，他地域との比較素材として使用できるものも含んでいるのである。

もちろん，資料批判という視点でみると，書かれていることをそのまま信じてよいのかという問題はある。しかし，それを読むと，第三者に読ま

＊千厩町史編纂委員（岩手県千厩町史編纂室勤務）
＊＊立命館大学産業社会学部教授

れることを念頭に書いたというふしはどこにも見当たらない。書かなかったこと，書けなかったことは多々あったと考えられるが，書きすぎた，あるいは作為的に誇張したということは，通読する限り，なかったと考えて間違いはない。

こうした主旨から，われわれは「日記」の本文をここに収録・紹介することにした。しかし，それはかなりの分量になり特殊な用語もふくまれているので，一般読者にとっては煩瑣であると考えられる。そこで解説文をさきに示し，本文は末尾に一括掲載することにした。解説文は以下の順序で構成されている。まず「日記」の筆者（菅原俊治）の社会的地位を理解するために，仙台藩の大肝入と肝入制度の概要をのべる。次に菅原家の来歴と親族関係を検討する。続いてこの「日記」を「テキスト」とし，ここから読みとることができる情報を抽出し若干の分析と解説を加える。具体的にはパーソナル・コンピュータにファイル化された「日記テキスト」から，四つの指標（登場人物，地名，家業，旅行・娯楽・休日）にかかわる情報を抽出・整理し，人物への言及頻度からみた「日記」の性格と作成意図，筆者の行動範囲，農業の内容と水準，娯楽などを推測しようと試みている。なお，ここでは補助資料として「磐井郡増沢村・新沼村高人数御改帳」（以下，単に「人数改帳」と表記）を，頻繁に使用している。日記の日付けは旧暦で，人数改帳の年齢は数え年で記されている。

Ⅰ　仙台藩の大肝入

百姓の身分で村方役の最高役職に任命された者が大肝入（大肝煎とも書く）である。地方によっては大庄屋・大名主ともよび，明治初年には郡正（里正〉とも呼ばれていた。仙台藩政時代の磐井郡東山地方では南方（みなみかた）大肝入，北方（きたかた）大肝入，一関御知行所東山（ひがしやま）大肝入の三人が任命され，次に示すように，それぞれが十数カ村あるいはそれ以上の村々を束ねていた。なお，下記については近世村落研究会編『仙台藩農政の研究』丸善，一九五八年及び，千葉明夫『仙台藩の大肝入 ── 磐井郡東山の資料を中心に ──』私家版，一九八五年を適宜参照している。

１　大肝入の初見

大肝入の初見については諸説があるが，「白石豊後代より御本判御役勤め候理由書上」（千厩町白石家文書）に，「白石与次右衛門儀　寛永一〇年大肝入仰せ付けられ相勤め候」と記されているように，寛永検地（一六四〇～四年）前後になると村方の御用が次第に繁多となり，中央の官制が整備されるにともない，地方の出先としてこの役職が明確に位置づけられ，寛永一五年八月に領内の諸郡に大肝入を配置して郡村支配の基盤を確立したのである。磐井郡東山地方の大肝入支配村割りは次のとおりである。なお村割りは，御蔵入地では寛永検地の前後に，一関知行地では天和二年（一六八二）に確定した。

東山南方村々（御蔵入）二十一ケ村
　千厩村，釘子村，津谷川村，大籠村，保呂羽村，藤沢本郷，増沢村，新沼村，砂子田村，西口村，黄海村，薄衣村，門崎村，濁沼村，仏坂村，松川村，相川村，舞草村，小嶋村，長部村，赤生津村。
東山北方村々（御蔵入）十五ケ村
　大原村，猿沢村，渋民村，曽慶村，大(上)奥玉村，下折壁村，浜横沢村，中川村，烏海村，田河津村，長坂村，築舘村，天狗田村，母躰村，上折壁村。
一関御知行所東山村々（田村領）十一ケ村
　北小梨村，南小梨村，清水馬場村，熊田倉村，金田村，上奥玉村，中奥玉村，下奥玉村，摺沢村，寺沢村，徳田村。

「日記」が書かれた文化二年当時，東山南方大肝入仮役には鈴木三太夫が，東山北方大肝入には烏畑弥太夫が，一関御知行所大肝入には菅原元右衛門がそれぞれ任命され，職務についていた。

2　任免

次の文書（様式）は大肝入の任命辞令である。これは，嘉永五年（一八五二）に藤沢本郷の及川芳一郎が東山南方大肝入を拝命したときのものである（藤沢町及川成一家文書）。八月一〇日仙台に召し出された及川は，郡奉行の役宅において直接辞令の交付を受けた。手当は先任者と同額（御役料五貫文）が支給されている。

嘉永五年八月十日仰渡
　東山南方役大肝入　及川芳一郎
東山南方大肝入　申渡候事
　勤仕中御役料之義ハ
　先大肝入江被下置候
　通被下設置候事

一方，大肝入の退役辞令の「様式」は発見されていないが，退役願いを提出して許可されたのである。

3　任務と待遇

大肝入の任務については，明治一七年に宮城県庶務課から提出した文書「牧野太政官書記官宛提出文書」（仮名）に明らかである。ただし，この文書は明治維新前の地方制度について記したものである（近世村落研究会編『前掲書』三四頁）。

大肝入
一 郡内ヲ総理シ，兼ネテ行政司法警察ノ事ヲ掌ル
一 肝入以下ヲ指揮監督スル
一 税金ヲ取纏メ送納ス
一 手代以下ヲ進退ス
一 経費ヲ支出徴収ス
一 犯人ヲ下調べノ上，代官ニ移牒ス
但シ平民ニ限ル

大肝入の任務は代官の命を受けて，管内の行政，司法，警察の役割をはたすことであった。すなわち村肝入などの村役人を指揮監督して年貢や諸税を取りまとめて送納する，手代以下の会所の事務員を任免する，諸経費を割りつけ徴収・支出する，罪人の下調べをし身柄を代官に移すなどである。大肝入の任務内容は一見したところ単純にみえるかもしれない。しかし，実際には膨大な職務をこなしていた。肝入から上申・回送されてくる帳簿，書類，書き物はかなりの数にのぼった（詳細は，千葉『前掲書』二八- 三二頁を参照）。

大肝入の待遇については，上記文書に以下のように書かれている。

大肝入
一 大肝入ハ所有地税ノ外，諸役諸郡役ヲ免シ，且ツ帯刀及ビ絹紬ヲ着スル事ヲ許ス筆紙墨其ノ他ノ費用ハ，所轄内ヨリ之ヲ徴収ス
一 大肝入ニ左ノ役員ヲ置ク
　手　代（書記）一員
　増手代（書記）一員
　締　役（犯人捕縛等ニ従事セシムル者）一員又ハ数員
　右ノ外増手代便宜置クコトアリ又小使一員ヲ置ク
一 大肝入ノ給料ハ，藩主ヨリ，草高五貫文，一貫文八十石二当ルノ現地ヲ給ス，其ノ草高ナキ者ハ，一ケ年金五両ヲ給ス
　但シ所轄内ヨリ給料ヲ補助セシ事アリ，其額ハ凡ソ一ケ年金三両以下ナリ

大肝入は年貢などの諸役を免除され，帯刀および絹紬の着用が認められた。給料として五十石が支給され，士分の待遇をうけた。大肝入役所には手代や増手代の書記，犯人捕縛の手伝いをする締役，小使などを雇用することができた。

4　御用帳簿

「千厩町白石家文書目録」に収録されている大肝入の御用帳簿類，備品には下記のものがある。

一 諸御用定留および諸留
二 検地帳および地形書類
三 風土記御用書上および諸書出
四 御詮議取都書類
五 雑書類
六 其の他

5　役職の継承

大肝入役は世襲を原則とした。白石家は東山南方大肝入として寛永一〇年（一六三三）から幕末まで勤務しているが，適切な人材（後継）がいなかったのか，菅原俊治，鈴木三太夫，岩淵東七郎，亀卦川安之助，菅原民治（俊治の四男），及川芳一郎，永沢茂兵衛なども役をつとめた。

北方大肝入としては，鳥畑家が寛永一五年から幕末まで勤務していた。その間，小山平太郎，金野一郎太夫，葦章右衛門，横沢康右衛門，中津山直三郎なども役をつとめたという記録がある。一関御知行所東山大肝入としては，天和二年（一六八二）から幕末まで菅原家（途中に宍戸寛之助）が勤務していた。

Ⅱ　村肝入

百姓の身分で村方役職に任命された者が村肝入である。村肝入は中世郷村の乙名，老名，沙汰人などにあたるが，近世初期には村の名門・旧家でかつて武士であった者がこれになり，近世中期以降になると裕福で実力と品格のある者が任命された。

1　村肝入の初見

仙台藩における肝入の初見については諸説があるが，「安永風土記書上」によると，磐井郡東山南方では文禄元年（一五九二）に釘子村宿屋敷の孫兵衛が，北方では慶長一八年（一六一三）に大原村町屋敷の熊谷新右衛門が，一関御知行所東山では元和二年（一六一六）に徳田村前城屋敷の五郎兵衛が，それぞれ肝入役に任命されている。寛永検地以後，磐井郡東山四七ケ村のそれぞれに村肝入が任命されたものと思われる。

2　任免

肝入の任命辞令についてはその「様式」が発見されていない。しかし，人柄や品性がよく，十分に職務を遂行できる人物を，大肝入が代官に推薦して任命されるのである。退役の際は「願い書」を提出した。

3　任務と待遇

先に示した明治一七年「牧野太政官書記官宛提出文書」（仮名）は村肝入の任務についても記載している。

村肝入
　部内ノ事務ヲ総理ス
　税金ヲ収入シ大肝入ニ送納ス
　部内ノ入送籍ニ係ル事件ヲ処分ス
　大組頭以下ノ進退ヲ代官ニ具状ス
　道路橋梁修築修繕之目論ヲ代官ニ具上ス
　物成帳ヲ編成シ代官ニ出ス
　諸税ニ係ル帳簿ヲ製シ代官ニ出ス
　物成リ検見ノ下調ヲナシ代官ニ具上ス
　請願ニ連署ス
　肝入ハ手代書記ヲ置ク事アリ　其給料ハ所轄内ヨリ徴収シテ便宜，之ヲ支給ス　給料ハ所轄内草高一貫文ニ付銭四文ヲ徴収シテ之ニ充ツ　但奉公人前地一貫文ニ付銭二文ヲ徴収ス
　肝入ハ所轄地ノ本税ヲ除キ諸役諸郡役ヲ免ス
　肝入職務ニ属スル筆紙墨其他ノ費用ハ所轄内ノ負担トス

肝入は主として村政に携わるもので，上に記されているように，その職務は極めて広範囲にわたった。具体的には年貢を徴収し大肝入に納付する，村戸籍帳簿を作成する，村役人を任命する，土木普請の具申をする，百姓条目を徹底させる，

村方諸帳簿を作成し保存する，村民の願いに署名するなど，多岐にわたる仕事があった。

肝入の待遇は，年貢（本税）の納付義務はあるが，土木普請，諸役，郡役等の人足に出なくてよい，仕事の手伝いとして手代や書記を雇用できると定めている。給料として村草（総）高一貫文につき銭四文を徴収しこれに充てた。

4　御用帳簿

村肝入が備えておくべき御用帳簿その他については，「文政七年定留」（藤沢町岩山家文書）に次のように記されている。帳簿数は三五点にのぼる。なお，『刈田郡誌』（九五－九六頁）に収録されている帳簿数は三三点（＊印およびカッコ内）である（近世村落研究会編『前掲書』四六頁，注５を参照）。

村々肝入共手前御用物覚
一　御検地帳＊
一　人高帳＊
一　御田地見帳＊
一　御田地見高帳
一　御手伝小割帳＊
一　村高帳＊
一　御雇(高)帳＊
一　地損倒目御本帳＊
一　村高壱人前仕分帳＊
一　村絵図面＊
一　村中御普請箇所並江間(地見)帳＊
一　御年貢納永代帳
一　村分並入合持高仕分帳＊
一　御人足永代帳＊
一　鉄砲御改本帳＊
一　御藪書上帳＊
一　御帳付諸木御改帳＊
一　駒口入(合)方帳＊
一　馬(御)改毛歳帳＊
一　御山守御聞判帳＊
一　御村備籾本帳＊
一　高分御聞判物＊
一　万御用留帳＊
一　金代取立(召上)帳＊
一　金穀拝借面付帳＊
一　類族御改帳＊
一　御村受御普請御勘定村控＊
一　漆木御改帳＊
一　御村受御人足箇所切召仕本帳
一　山林方御本帳＊
一　小役御雇水下御人足壱人前出高面付帳＊
一　御普請方諸金代受払本帳＊
一　諸償割本帳並金代受払帳（控）＊
一　所々垣結並受取帳場村控帳
一　高提灯，小旗
　御買米納永代帳＊
　御藪守聞判＊
　その他一点＊

「御田地見帳」は坪刈（村内の上，中，下田から任意の一坪を刈り取り，収量を検査すること）の結果を記した帳面，「駒口入方帳」は駒（当歳～五歳まで）の調査・登録簿で出産や購入による異動を把握したもの，「馬改毛歳帳」は毛並みと年齢とを記した馬の戸籍帳。「小役御雇水下御人足壱人前出高面付帳」は持高に応じて百姓に賦課された各種賦役（小役人足，雇人足，水下人足）の個人別割付帳，「諸償割本帳並金代受払帳」は代官，大肝入，肝入に関わる必要経費の郡村割付とその収支を記した帳面である。

肝入が交替する際，これら大量の帳簿類は新任が一括して引継ぐことになっていた。肝入の職務がどれだけ多岐わたっていたか，また如何に膨大な仕事を遂行していたかということがわかる。二番目の「人高帳」は，実際には，「高〔當〕人数御改帳」の名で作成された。なお，この御用帳簿一覧には「懐妊調」帳が含まれていない点に注意したい。

5　役職の継承

村肝入役は，大肝入と同じように，世襲を原則とした。白石家，鳥畑家，菅原家などにみれらるように，一〇代以上にもわたって代々世襲してきた場合もある。例えば，肝入役と大肝入役とをつとた増沢菅原家（現在の岩山家）であるが，この家は増沢村の肝入を，享保五年（一七二〇）以来，一五〇余年にわたってつとめた。また享保一四年以降，新沼村肝入を兼帯した。嘉永年間には俊治が大肝入仮役を，民治が大肝入本役をつとめた。

肝入の役宅は自宅であり，そこで執務した。大肝入の役宅は会所であり，東山地方では千厩，大原，小梨にそれがあり，彼らはそこで執務した。俊治が頻繁に千厩に行った理由の一つはそこにある。ただし，「日記」のなかで「千厩御会所」と明記したのは一回（四月一一日）だけである。

6　年間の職務

俊治の一年間の職務記録を，「日記」本文から日付順に拾いあげてみよう。ここから肝入の多岐にわたる仕事の一端がわかる。記録された数は，それが公務であったのか私用であったのか区別できないものを含め，八五回にもなる。具体的には道普請（監督），馬改め，喧嘩の仲裁，人数帳引き合わせ（一月末でなく四月初めにおこなわれた），会所での条目よみあげ，組頭寄合への出席，藩役人の接待，役人に対する年貢減免要望，年貢麦籾の収蔵，田地山林の境界争い・家庭不和の仲裁など多岐にわたる。ここでは，はっきりしない用語（例えば「御継娘伺」）もあるが，公務（村肝入および地肝入［地方知行主の地頭］の職務）とわかるものを記してみよう。

正月　九日　朝より十文字内道拵
　十日　朝昨日仕懸之道普請
　十四日　火ノ田屋敷与右衛門子共久之助伊勢参下向　日光道中楡木ニ而病気　大田原ニ而病死　同所年寄中より書状到来ニ付吟味　返事等認遣
　十八日　予千家之助様御出ニ付台へ行
二月　朔日　官蔵様御同道衣川より行
　二十一日　馬改致候事
　二十四日　石ノ脇長蔵百目木文太郎喧嘩内済寺申受
三月　六日　新沼の御普請見分
　七日　届石之権右衛門　小森下上場ノ所道拵之事ニ付来ル
　八日　石倉沢より始誂石辺迄山境見分　文右衛門立合
　九日　岩倉沢田地山境見分　栄助龍蔵立合
　十一日　田地境見分立合文右エ門　中森山より上田林分見終ル
　十二日　利作塩受取　昼前養助ヲ山見分二連ル　山境見分昼過迄ニ仕廻小林分　長根の山落境形杭指ヲ立
　十六日　判形
四月　二日　予大肝入衆ヲ本役御悦ニ行泊
　四日　人数帳引合
　十一日　千厩御会所ニ而御条目　千厩釘子砂子田増沢新沼西口黄海薄　衣門崎松川濁沼 仏坂 合十二村也
　十六日　前夜吉兵衛幸左エ門喧嘩
　十七日　朝吉兵衛幸左エ門一件ニ付組頭中ヲ寄ル　予雑費方書き出之儀ニ付千 厩へ行
　二十四日　昼過石ノ脇ノ養水樋の事ニ付見分ニ行
　二十六日　御郡奉行引地正右衛門様大原御出立　室根山御懸越千厩御泊ニ付同所へ御継娘伺ニ罷出
五月　朔日　予書出し物ニ付千厩へ行
　十八日　本組頭中寄合申し渡し諸吟味事致　且幸ノ助手分之儀茂吟味致候事
　二十二日　予幸之助一件ニ付白東へ取合ニ行　源内へ御駕籠奉手立　御聞

判物書き出誂置
六月　朔日　新沼組頭中雑費料ノ儀ニ付寄合致候
十一日　予岩下へ同組寄合ニ付行
十四日　予丹左衛門様へ罷出ル
二十日　予千厩へ行　御代官石田軍内様この日御下ニ付御継娘伺ニ出
二十九日　予駒口御〆切并償御聞判取千厩へ行
七月　七日　新沼麦取納
四日　朝幸ノ助并親類孫右エ門組頭助太郎引添以来　諸進取次不罷成返申断
八日　増沢麦取納
九日　御代官石田軍内様黄海通御登仙ニ付昼より御案内出　当村御備麦納
十日　予千厩市へ行　御郡方横目熊谷甚助様千厩へ御着
十五日　予朝御横目熊谷甚助様へ中元ノ御礼ニ出　松印同道
十七日　鉄砲判形治右衛門同道ニ而行
十八日　諸上納延滞之者共在之
八月　三日　予吉祥寺幸之助山境見分二行
八日　吉祥寺山の取合之儀ニ付安右衛門来
十日　予西口和子ノ峯甚左衛門辺よりニ出火致候ニ付　大肝入名代ニ行　大浦半之助様御出指示
二十七日　両村組頭寄合申し渡　漆御直掻并漆値立　勧進角力観免之事　並松植立　諸色納物無延滞様不作見分之候事　七ケ年夫償御座御小広間御建方御材木加馬御雇代割方申し渡
八月　朔日　新沼内惣毛
（閏）二日　増沢内見
三日　増沢内見
四日　増沢内見
十日　予神田の仲四郎親子不和合申の事ニ村取持ニ行　台ニ泊
十四日　予御代官様御下ニ付千厩へ行　給処同役共不揃ニ付空戻
十八日　漆ノ直掻ニ付飯沢優治様西口より御取移　掻子十六人
二十日　御内惣毛様千厩御出立　当村御見分　西口御昼黄海御泊被仰渡候処雨天ニ付延ル　優治様藤沢へ取移
二十一日　御内惣毛様御廻村　増沢村皆無強ニ付減高致候様被仰含　西口御昼所罷出減高申上ル
二十四日　予岩倉ノ田地見分ニ行　台ニ泊
九月　二日　千代ノ助は西口へ状夫
三日　御代官様御横目様御郡司様御案内ニ千厩御出立　黄海へ御取移立石長根ノ烽火ニ於連申ニ付　幸ノ神辺御案内
四日　御郡奉行林弥平様米谷御出立　黄海御昼　千厩御泊　予官蔵様御同道黄海良善院へ行　夫より御案内
八日　予藤沢へ大肝入名代文五郎見分ニ行
十日　塩渡
十四日　御早石并御備石之儀ニ付組頭中ヲ呼
十五日　御代官様并渡辺又右エ門様藤沢へ御出立　千厩へ御引返
十七日　予奥玉より帰　直々千厩ニ而御代官様へ出
二十二日　新沼一村相寄諸御用申し渡
二十四日　増沢村相寄諸御用申し渡
二十七日　新沼御普請所見分
十月　四日　利作西口へ状夫　増沢触流三治新沼へ触流
二十四日　大肝入衆源内京吉被召連吉祥寺幸之助論所山御見分ニ御出
二十五日　三治ハ触書状夫
二十九日　新助砂子田へ触書
十一月　六日　予薄衣御本石所へ行

十五日　予薄衣御駒場へ行
十七日　薄衣御駒場御売仕廻　夜中戻ル
二十一日　予御代官様へ罷出　千代ノ助薄衣へ遣
十二月　十日　予御〆切并諸償御聞判取ニ行
十二日　新沼籾取納欠石之作左エ門蔵へ入
十四日　増沢籾取納　金山沢治左エ門蔵へ入

Ⅲ　菅原家の来歴

1 家の来歴

菅原家の祖は，所蔵の系図によると，桓武天皇に仕えた藤原氏系の千葉氏であったとされる。源頼朝は奥州平泉の藤原氏を滅して天下を統一し，葛西清重を奥州奉行としてその統治にあたらせた。千葉氏も葛西氏とともに奥州に下り，葛西氏の家臣として登米寺池に代々居住していた。主家葛西氏の親類となり，また大崎氏と縁を結ぶこともあって，歴代重きをなした家柄だったようである。

戦国時代，千葉氏は右馬介胤光の代に嗣子がなく，さらに永正元年（一五〇四）七月，胤光は金沢（かざわ）の戦で討死した。その後嗣となったのは千葉式部胤則である。胤則はもと京都三條に住し菅原道真の後胤であったから，千葉氏を廃して菅原氏に改姓，初代となったという。以下，二代宮内胤帥，三代弾正胤道，四代掃部介胤信，五代帯刀胤道とつづいた。五代帯刀は天正十八年（一五九〇）八月十四日，桃生郡涌谷合戦に出陣，敵の首三つを打ち取り軍用金をも献納したので，葛西晴信より知行書，太刀，感伏を拝領した（千厩町菅原興一郎家文書）。

以上から，菅原家は葛西氏と深い関係をもち，重んじられてきたことが推察される。しかし，時勢をみる眼に欠けた葛西氏は豊臣秀吉によって滅亡させられたので，菅原帯刀は所々流浪の後，磐井郡東山千厩村に土着，千厩菅原氏の初代となった。この帯刀には二男一女があった。系図には長男隼人道安，次男主馬道安，そして女子が記載されている。しかし，千厩菅原家の系図はここで終わっている。それ以降，現当主菅原虎雄氏までの流れは不明である。

次に増沢の菅原家であるが，これは千厩菅原家からの分家であり，増沢菅原氏とでも称すべきものであろう。これについては，明治三年「磐井郡東山増沢村風土記書上」中の数代之御百姓のなかに，以下のように記されている。

九代相続上久手屋敷肝入銀治［右馬之助の子，文政四年三月生，当時五十歳］
右銀治先祖菅原惣左衛門以前当郡千厩村新山二居住惣左衛門代当村江取移以後代々住居仕候ニ付同人より書上仕候

先祖　菅原惣左衛門経記
一 増沢村二而田畑多持受妻子引具家作相続仕候
一 次男八之丞ト申者同屋敷江分家新百姓壱人相出申候

二代　惣左衛門嫡子
増沢村肝入十左衛門泰歴
一 享保五年七月増沢村肝入御役被仰付同八年迄四ケ年相勤願之上退役仕候
一 次男武右衛門ト申者砂子田村江分家新御百姓壱軒相倍申候

三代　十左衛門嫡子
増沢村肝入新沼村兼帯久兵衛溢維
一 享保八年八月右十左衛門後役増沢村肝入被仰付候
一 享保十四年隣村新沼村肝入被仰付候
右之者農業無怠心掛困窮之村ニ候処沽却者無之様為仕一村之風俗共相直勤方宜三十三ケ年

守備能相勤候ニ付宝暦五年七月御褒美金壱分被下置願之上退役仕候
一 次男市之丞ト申者増沢村成石屋敷江分家新御百姓相出申候

四代　久兵衛嫡子
両村肝入太右衛門包晴
一 宝暦五年七月右久兵衛後役両村肝入被仰付候
一 安永四年迄二十一ケ年相勤願之上退役仕候
一 次男仲作ト申者同村江分家新人頭二相出申候

五代　太右衛門嫡子
両村肝入休左衛門満康
一 安永四年右太右衛門跡役両村肝入被仰付候
一 安永八年金子差上苗字帯刀麻上下着用御免被成下候
一 天明七年迄十三ケ年相勤願之上退役仕候

六代　休左衛門嫡子
両村肝入俊治満康［「日記」の筆者］
一 天明七年右休左衛門跡役両村肝入被仰付候
一 寛政元年金子差上御知行高弐百七拾文被下置候
一 肝入御役二十ケ年以上深切二相勤為御褒美鳥目七百文文政九年被下置候

七代　俊治嫡子
両村肝入惣左衛門満敬［千代之助］
一 文政八年右俊治跡役両村肝入被仰付候
一 天保四年四月病気二付願申上退役仕候勤仕年数八ケ年

八代　惣左衛門実弟
両村肝入民治満盛［右馬吉］
一 天保四年五月右惣左衛門跡役肝入被仰付候
一 弘化四年八月東山南方大肝入御役被仰付御役料高五貫文補金三両被下置帯刀鞍馬御免被成下候
一 嘉永五年大肝入御役御免被成下度品々申上願之上通退役肝入御役より引続二十六ケ年相勤申候

九代　民治嫡子
両村肝入銀治満孝
一 弘化四年八月右菅原民治後役両村肝入被仰付候
一 二十二ケ年両村宜敷取扱居候為御褒美鳥目弐貫文慶応四年四月被渡下置候
一 遠祖十左衛門儀享保五年肝入御役被仰付以来九代之間明治二年迄百五十年連綿相勤候処仙台様御領地被召上明治二年磐城安藤対馬守様御替地二罷成同年秋磐城江御復帰被為成則天朝御直御百姓胆沢県御支配二罷成年中三ケ度御引渡二相成引続奉勤仕候

銀治は明治五年（一八七二）に戸長・区長となり，その子・弘治も副戸長となった。さらに学制発布後は，学務委員として学校教育の進展に貢献している。

このように菅原（岩山）家は享保五年以降一五〇余年の長年月にわたって，増沢村肝入，南方大肝入等の村役人，郡役人として勤務し地域の発展に貢献した功績は大きかった。なお，上に記された五代休左衛門，六代俊治，八代民治の肝入（大肝入）役の就任・退任時期や在任期間と，「人数改帳」記載のそれとの間に若干の齟齬があるが，ここでは立ち入らない。

2　文化二年の菅原家

文化二年の「人数改帳」に記載された俊治の二月一日現在の持高，旦那寺，世帯構成などは下記の通りである。なお，年齢は数え年で記されている。

高四貫四百七文 外一 百七十六文新田 一 五百十五文新田砂子田村江入作

曹洞宗金昌寺　肝入

一 上久手屋敷俊治四十三，一 女房四十壱，一 千世之助二十歳，一 男子勇五郎十五，一 男子午吉八，一 男子京蔵五，鉄砲持主 一 親久左衛門六十六，一 下人喜三郎，一 下人養助三十六，一 下人幸助二十二，一 下人吉太郎三十，一 利作二十，一 下人三次十六，一 下女いほ十三

合拾四人 内男拾弐人 女弐人

同年一一月に女子が誕生し，寿へと名付けられた。俊治が世帯主で，農業を家業としながら肝入役をつとめた。農作業に実際に従事したのは奉公人たちだったであろうが，一度に多数の人手が要る「ふませ」などの際（五月五日）は，家内総出で仕事をしている（「ふませ」は代かき田へ刈敷きを踏みこむ作業であろう。佐瀬与次右衛門『会津農書』〔貞享元年〕にはこう記されている。「馬屋糞，青刈敷多く入ル田ハ，殖代かき跡拵へ人を定め置，一所へかきよせたる養をまんへんなくふり散し，泥の中へふミ込てよし」。山田龍雄・飯沼二郎・岡光夫編『日本農書全集 19』農産漁村文化協会，一九八二年，四五- 四六頁）。勿論，職務がないときは俊治も各種の仕事に携わっている。

この年，奉公人として男六人，女一人がいた。奉公人には質物奉公人と年季奉公人とがあった。前者は債務の担保に人身を質入れした奉公人で，定められた年季を労働に従事した。人主または口入人が身代本金を返済すれば季明けとなり，自由の身となった。後者は年季を定めて奉公する奉公人で，労働賃銭は前渡しされることが原則であった。しかし，七人の奉公人がそれぞれどのカテゴリーに属していたかは，残念ながらわからない。

3　別家と親類

増沢菅原家（大本家は千厩村新山屋敷の菅原家）の別家は，前記明治三年の「風土記書上」によれば，五軒あった。

第一別家

初代惣左衛門の次男八之丞が同（上久手）屋敷へ別家。文化二年，上久手屋敷には俊治のほか松太郎，利惣太，伊ノ吉の四軒があった。

第二別家

二代十左衛門の次男武右衛門が砂子田村上山屋敷へ別家。文化二年の上山屋敷の軒数は砂子田村の「人数改帳」がないので不明。

第三別家

三代久兵衛の次男市之丞が成石屋敷へ別家。文化二年の成石屋敷には養吉一軒があった。

第四別家

第四代太右衛門の次男仲作が下久手地内小舘屋敷へ別家。文化二年の小館屋敷には栄助一軒があった。

第五別家

第八第民治（右馬吉）の三男東七が成石屋敷へ別家。文化二年の成石屋敷には養助一軒があった。

親類（姻族）は村外に分散していた。すなわち嫁は千厩村新山屋敷，藤沢本郷西古戸屋敷，同玉ノ沢屋敷，濁沼村大峰屋敷，上折壁村安場屋敷，薄衣村外山屋敷，中川村某屋敷，上山屋敷，仏坂村蓑毛屋敷，寺沢村脇ノ沢屋敷，富城石越村など迎えていた。嫁ぎ先きとしては増沢村平屋敷，同村洞屋敷，千厩村小友平屋敷，黄海村玉崎屋敷，同村嚢南屋敷，上奥玉村某屋敷，千厩村昆野家，薄衣村佐伯家，濁沼村荒谷屋敷，上山屋敷婿，一間山本屋婿，藤沢本郷熊谷家，千厩村昆野家（婿），増沢村菅原家（別家，婿），金沢村菅原家，渋民村小山家などがあった。肝入，大肝入等の役職をつとめた家柄であったため，同格かそれに見合う家柄の者を迎え，送り出していた（「岩山家系図書き」による）。

なお，役職上の相手や日頃の交際相手は，次節

（Ⅳ）にみるように，多岐にわたっていた。御郡奉行や代官など藩役人，増沢村・新沼村の知行主をふくむ武家たち，大肝入や肝入衆（同格者），組頭衆や村百姓，その他商人・職人たちから旦那寺（金昌寺）におよぶ。村鎮守（立石神社）の世話人をしていたためか，九州地方の六部なども来訪し，他方で医者，風流人，座頭，浪人たちとも交わっていた。

Ⅳ　登場人物

「日記」は簡潔な文章で書かれた。行数は長くて七～八行，短い場合は天候についての記録が一行程度で書かれた。しかし，ここに登場する人物は一五九人をかぞえる。これらの人びとをいくつかのカテゴリーに分類し，出現回数を計算した。分類の視点は家人，親類，奉公人，出入人，藩役人，地方知行主，村方役人，寺・修験，医者・文人・芸人等，商人・職人，そして百姓の一一カテゴリーである。分類にあたっては，本文の文脈や前後関係，苗字や「様」づけの有無を考慮し，年齢については「文化二年増沢村・新沼村人数改帳」を参照した（表１）。しかし，どの範疇に入れるべきか手掛かりのない者もいる。とくに「百姓」中には，別の範疇に入れるべき者がいる可能性がある（表１～３は，従って，暫定的なものである）。

家人は九人登場する。予（俊治）という自称が九二回使われていることはともかく，関心の対象は「親様」（父親休左衛門）「母様」，次男（嗣子），三男である（実母は享和三年〔一八〇三〕一二月に「病死」している。戒名は圓心明覚信女〔「御悔申受覚帳」岩山家文書〕。従ってこの人は別人と考えるべきであろう）。妻への言及はわずか二回しかない。この年一一月に出生した寿へについては，一一日夜中に妻が「腰付」（陣痛に伴い産屋入り）をし，一三日「八ツ頃安産」したとの記述はあるが，赤子に対する印象については何も記していない。こうした点に，この時代としては当然のことかもしれないが，ジェンダーギャップ（性差にもとづく感性の違い）を看取することができる。

子どもへの愛情を推測させる例としては，三男勇五郎に書籍，地図など四点（「商方二巻并万国図一枚中華図一枚ロシアの呈書和解一通」）を与えた記述（一〇月七日）が見られるだけである。現代人が日記をつける目的の一つに，自らの感情を表現したり，それを通じて苦痛を和らげたりすることがあるということは間違いない。この点についても俊治はほとんど何も書き残さなかったが，「前木ノ馬鹿者来」という記述（九月七日）は唯一の例外的事例かもしれない。親類として言及されている七人はすべて村外居住者である。

奉公人七人のうち二人は「人数改帳」からムラの者とわかる。奉公人たちについては「内（家）へいく」などという記述があるので，村内や隣村などから住み込みで来ているのであろう。「人数改帳」には下女いほ（一三歳）が記載されているが，「日記」では言及されていない。いほを除く奉公人一人当たりの言及数は平均三〇回と頻繁であり，出入人（日雇）への言及数も多い。ここから俊治の関心の所在，ひいては「日記」の作成目的の一つが明確となる。

主人と奉公人の関係が生きいきとわかる例として養助がいる。養助は寛政一一年〔一七九九〕に三〇歳で奉公に入り，文化三年〔一八〇六〕までの八年間を奉公人として過ごした。彼に対する言及は二月から一二月まで三四回あるが，十分な働きはどうやらできなかったようである。田打ちが始まった四月初めから「病気」がちとなり，「不参」が続いた。一二日にやってきた彼は「飯後より養助来稼真似致候」という状態で，のらりくらりと仕事をしていたようである。それは一六日まで（五日間）続き，この間俊治は注意深く観察している。以後も妻や自分の病気を理由に「不来・不参」が多かったので，年末二日には口入人・人主の「幸蔵辰之助養助ニ付詫ニ来」たとある。また，「喜太郎嘉吉ハ麦刈致候処引込臥居　昼飯も

「乙丑日記」人名リスト

種　別	番号	名前	続柄	年　齢「人数改帳」	地　位	居住地 (屋敷)	出現回数	備　考
1 家　人	1	予	本人(俊治)	43	増沢村肝煎,菅原家6代当主	増沢村(上久手)	92	新沼村肝煎兼帯
	2	お国(妻)	妻	41	嫡男榮太郎,早死	増沢村(上久手)	2	
	3	千世(代)之助	次男	20	(７代当主)	増沢村(上久手)	17	(新沼村肝煎兼帯)
	4	勇(雄)五郎	三男	15		増沢村(上久手)	14	
	5	右馬(午)吉	四男	8	(８代当主)	増沢村(上久手)	1	
	6	享蔵(京蔵)	五男	5		増沢村(上久手)	0	
	7	寿へ	四女	0		増沢村(上久手)	0	文化２年11月13日誕生
	8	親様	父親	66	(5代当主)	増沢村(上久手)	20	鉄砲持主
	9	母様	母親				10	
	10	おとり	次女		婚出(享和３年２月～４年１月末)	濁沼村(菅原家)	11	帰家,この年再婚(17歳,昆野屋へ)
2 親　類	11	円治	親類		薄衣村		12	佐伯姓
	12	昆野屋	親類		千厩村(町)		4	茂兵衛(５代),甚兵衛
	13	新右衛門	親類		濁沼村(大峰)		2	菅原姓,おとりの夫
	14	長作	親類		上奥玉村		6	太田長治右衛門嫡
	15	市左衛門	親類		千厩村(新山)		2	
	16	加(嘉)兵衛	親類		薄衣村(加妻)			
	17	お屋寿	親類?		薄衣村			
3 奉公人	18	喜太郎(喜三郎)		37	下人	増沢村(上久手)	25	深持屋敷万之丞(18歳,212文)の伯父
	19	吉太郎		30	下人	増沢村(上久手)	38	
	20	幸助		22	下人	増沢村(上久手)	24	
	21	三治		16	下人	増沢村(上久手)	22	
	22	養助		36	下人	増沢村(上久手)	34	
	23	利作		20	下人	金田村	36	
	24	いほ(ネ)		13	下女	増沢村(上久手)	0	下久手屋敷孫太郎(47歳,334文)の娘
4 出入人	25	伊之吉			雇い		18	
	26	おつや			雇い		10	桑取手伝い
	27	おみの			雇い		18	
5 藩役人	28	飯沢優治様			仙台藩御内免毛方		2	
	29	猪狩高麗(駒)蔵様			仙台藩御郡方役人		3	
	30	石田軍内様			仙台藩御代官		2	
	31	大浦半之助様			仙台藩御郡方役人		1	
	32	熊谷甚助様			仙台藩御郡方横目		2	
	33	丹左衛門様			仙台藩御代官		1	
	34	林弥平様			仙台藩御郡奉行		1	
	35	引地正左衛門様			仙台藩御郡奉行		1	
	36	渡辺又右衛門様			仙台藩役人		1	
6 地方知行主	37	石井友蔵					1	
	38	市之助様					1	
	39	伊東様			増沢村知行主		1	
	40	泳三様					1	
	41	官蔵様			増沢村,新沼村知行主		15	村上姓
	42	熊谷治左衛門					2	
	43	和助殿			奥山家中	藤沢村(町)	0	国分姓
	44	衣川様					3	
	45	左膳様			新沼村知行主		3	村上（台様）
	46	白石隼太様			奥山御預給主	千厩村、藤沢村	0	
	47	白石小四郎様			千厩村知行主	四日町住居	1	
	48	千家之助様			新沼村,増沢知行主		4	上郡山
	49	千葉作右衛門			西口村品替百姓		1	
	50	張山様					1	
	51	三浦林七					2	
	52	水野様			増沢村知行主		1	

	53	沼倉卯左衛門		官蔵様家来		2	
	54	御徳方				1	
7 村方役人	55	市左衛門	55	組頭	増沢村(洞)	1	
	56	栄蔵		砂子田村肝入	砂子田村(田ノ畑)	4	
	57	助太郎	33	組頭	増沢村(小菅)	1	
	58	仲四郎	43	組頭	新沼村(中)	2	
	59	東左衛門		東山南方大肝入	千厩村	1	白石姓,宝暦13～文化１年
8 寺,修験	60	円融寺		真言宗智山派	藤沢本郷	1	真言宗
	61	吉祥寺(法印照寛)	44	真言宗智山派	増沢村	8	真言宗
	62	金昌寺(隠居活全)		曹洞宗,旦那寺	砂子田村	10	曹洞宗
	63	大善院	50	羽黒派山伏(鎮守熊野社別当)	増沢村(宮本)	1	
	64	神教坊	30	羽黒派山伏(鎮守熊野社)	増沢村(宮本)	1	
	65	良善院		羽黒派山伏	黄海村	1	
9 医者／文人芸人等	66	元理老		千厩町医者	千厩村	2	遠藤家抱
	67	高橋(東皐)		俳人	藤沢村(町)	1	
	68	岸宗仙			岩船	1	
	69	周斎				1	
	70	座頭		座頭	折壁村	2	
	71	女六部			美作(岡山県北部)	2	
	72	六部			豊後(大分県)	2	七兵衛
	73	浪士		浪人		4	
10 商人／職人	74	及川勘右衛門		商人	藤沢村(町)	1	加賀屋
	75	丈右衛門		問屋	薄衣村	1	
	76	武田五右衛門		新宮手代		1	
	77	長蔵		商人	千厩村(町)	1	泉屋
	78	治平		桶屋		1	
	79	四郎治		木伐り	折壁村	1	
	80	茂兵衛		屋根屋	保呂羽村	1	
	81	弥右衛門		屋根屋	藤沢本郷	1	
	82	善蔵		杜氏		4	
	83	善蔵		大工	石越村	1	
	84	浪江		細工師		5	
	85	源内		絵師?	千厩村角	5	
11 百　姓	86	伊右太				1	
	87	卯右衛門			砂子田村(日当)	1	
	88	丑太郎	34		増沢村(下平)	2	2月20日病死
	89	栄吉				1	
	90	栄助				2	
	91	栄之助				1	
	92	おあき				1	仏坂村
	93	おかね		手伝人		1	
	94	おけん		手伝人		1	
	95	おげん		手伝人		1	
	96	おさん	53		増沢村(下久手)	1	新助の娘
	97	おつる		手伝人		3	
	98	おふか	61		増沢村(下久手)	5	新助の妻
	99	おより		手伝人		1	
	100	嘉吉				1	
	101	岸宗仙			岩船	1	
	102	吉兵衛	29		増沢村(菅)	6	
	103	久之助			砂子田村(火の田)	1	与右衛門子,伊勢参宮下向中楡木で病死
	104	京吉				4	
	105	源助				2	
	106	幸左衛門	64		増沢村(南)	4	
	107	幸ノ助	33		増沢村(南)	2	吉祥寺と山境争い
	108	権右衛門	45		増沢村(届石)	1	
	109	作左衛門	49		増沢村(小森)	1	
	110	作左衛門	50		新沼村(欠石)	1	

111	作四郎		砂子田村田茂の沢	1	
112	作之助		下矢作村打越	1	高田神明御祭礼拝見の際の宿泊先
113	左蔵	38	増沢村(金山沢)	1	与太郎子
114	三之助		世田米村	1	
115	三平			1	
116	治右衛門			1	
117	七兵衛		釘子村	1	
118	庄右衛門	56	増沢村(洞)	3	
119	庄松		矢作村二又	1	高田神明御祭礼拝見の際の宿泊先
120	甚右衛門	54	新沼村(宇南)	1	
121	甚左衛門		西口村和子ノ峰	1	
122	甚作			1	
123	清右衛門			2	
124	清太夫	42	新沼(荷積場)	2	
125	専吉		山目村	2	
126	善作	29	増沢村(沼入)	1	
127	惣作		薄衣村	1	
128	惣七		奥玉村	1	高田神明御祭礼の同道者
129	大吉			4	
130	仲作	25	新沼村(細田)	3	25才の年祝い
131	仲七			1	
132	長右衛門		薄衣村	1	
133	長作		(田中)	2	
134	長四郎	38		1	
135	長蔵	42	増沢村(日当)	2	通称石ノ脇
136	長太郎		薄衣村	2	
137	貞右衛門		釘子村	1	
138	藤兵衛		千厩村	2	
139	文太夫			1	
140	文太郎	31	新沼村(百目木)	1	
141	孫右衛門	59	増沢村(南)	3	幸ノ助親類
142	孫作		増沢村(小森)	1	
143	政吉		肥前大村御領彼杵	1	
144	松栄			1	
145	松吉			1	
146	松太郎	34	増沢村(上久手)	4	
147	万四郎			2	
148	茂吉		薄衣村	1	高田神明御祭礼の同道者
149	安兵衛		千厩村	2	
150	弥太郎		薄衣村	1	
151	弥太郎		千厩村(神子ノ沢)	1	
152	勇蔵		薄衣村柳ノ沢	1	
153	勇蔵		(畑ノ沢)	1	
154	養吉		千厩村(中上)	2	娘を奥玉村長作妻に嫁がせる
155	由松			4	
156	利右衛門			1	
157	利左衛門			1	
158	利助		寺沢村	3	
159	龍蔵			1	

注　「名前」の（　）は，「日記」がそのようにも書いていることを示す。

喰　夫より何方へ参候や居合不申」という記載（六月一〇日）もあり，奉公人の監督には特に注意しなければならなかった，ということがよくわかる。

藩役人は九人登場する。いずれも苗字があり「様」づけされている。こうした役人には，定期的な回村（検見，監察）の際，あるいは非常時（火事）などに接したらしく，言及数は少ない。村方居住の武家である地方知行主への言及も，特定の人物を除いて，多くはない。彼らは一八人いるが，おそらく日常的な接触頻度はもっと多く，親しみもあったのであろう，苗字を省いて「様」「殿」づけされているものが多い。これに対して，肝入衆や村組頭などへの言及は五人しかなく，意外に少ない。職務にかかわる事項は『定留』など御用帳簿に記したであろうから，それは当然であるかもしれない。

旦那寺以外の寺，医者・文人，商人・職人などへの言及も多くない。豊後や美作からは六部がやってきた。六部とは「法華経を六六部書き写し，日本全国六六か国の国々の霊場に一部ずつ奉納してまわった僧」で，「鎌倉時代から流行。江戸時代には，諸国の寺社に参詣する巡礼または遊行聖。白衣に手甲・脚絆・草鞋がけ，背中に阿弥陀像を納めた長方形の龕を負い，六部笠をかぶった姿で諸国をまわった」者たちのことである（松村明編『大辞林』三省堂，一九九一年，二五八六頁）。彼らは，全国（西南・近畿，中部・関東地方など）の豊富な情報を家人たちに伝えたに違いない。地方職人の大部分は出入りのものたちで，彼らは屋根葺き，大工仕事，桶作り，酒造などに従事した。ここでは登場人物の約半数（六七人）を百姓に分類しているが，彼らと俊治との関係はよくわからない。

V　地　名

「日記」に記された地名数が人名数とほぼ同数（一四九）であることは，偶然であろうが，興味深い。しかし，ここで使用されている地名は，本文から判断して，いくつかの種類・水準に分類できる。

一つは現在の市区町村名，二つは現在の大字（江戸時代のムラ）名，三つは小字名にあたる地名である。四つは通称地名で，これにはムラ人に共有されたものと各家に固有のものとが含まれていると考えられる。後者は田畑山林の一枚一枚に付けられる名称をふくみ，その名前は土地を手放さない限り代々伝えられてきた可能性が高い（それゆえこうした「地名」を，家人に確認できる場合はともかく，公図や公簿で確認することは恐らく困難であろう）。五つは屋敷名であり，これは単独に使用されたり，人名に前付けされて使用されたりしている（仙台藩農村の「屋敷」については，宮城県史編纂委員会編『宮城県史２近世』宮城県史刊行会，一九六六年，一九四－一九六頁。守屋嘉美「近世前半期の共同体 ── 仙台藩領における村落について ──」中村吉治教授還暦記念論集刊行会編『共同体の史的考察』日本評論社，一九六五／七〇年，特に一二七－一三三頁などを参照されたい。ただし，「安永風土記書上」や「人数改帳」をみると，本百姓一軒に屋敷一つが付随しているわけでは必ずしもなく，数軒をふくむ屋敷まであり区々であった）。屋号もまた地名と同じように使用されたであろう。

しかし，こうした水準に整理しきれない名称も，数は多くないが，あるだろう。また，町村合併や区画変更などによって既に失われた地名もあろう。従って，本文中の全地名を現所在地に引き当てることは完全にはできない。しかし，不明地名の大部分は，本文の文脈や使用法から判断して，小字か通称地名と考えて間違いなかろう（表２）。

上記のような困難はあるが，多数の地名を整理し計算すると，筆者俊治の行動範囲と彼を巡る人びと（奉公人，家人，その他）の活動範囲・所在空間とが，合成されたものとしてではあるが，明確となる。ここでは二つの視点から地名データを

表２　「乙丑日記」地名リスト

番号	地　名	読みかた	現所在地 県	郡／市	町／村（屋敷）	出現回数
1	愛宕平	あたごひら	岩　手	東磐井	増沢	3
2	愛宕山	あたごやま	岩　手	東磐井	増沢	1
3	荒屋	あらや	岩　手	東磐井	濁沼	7
4	石倉沢	いしくらざわ	岩　手	東磐井	新沼	1
5	石越	いしこし	宮　城	登米	石越町石越	1
6	石津台	いしづだい(だへ)				1
7	石巻	いしのまき	宮　城	石巻市		1
8	石ノ脇	いしのわき	岩　手	東磐井	新沼(屋敷か)	2
9	伊勢	いせ	三　重	伊勢市		1
10	壱貫森山	いっかもり	岩　手	東磐井	砂子田(壱貫森)	1
11	稲田	いなだ				1
12	入	いり	岩　手	東磐井	砂子田	2
13	入上山	いりかみやま	岩　手	東磐井	砂子田	1
14	入ノ洞	いりのほら	岩　手	東磐井	増沢成石	5
15	岩倉	いわくら	岩　手	東磐井	新沼(屋敷)	1
16	岩倉沢	いわくらざわ	岩　手	東磐井	新沼	1
17	岩下	いわした				1
18	岩船	いわふね				1
19	岩谷堂	いわやどう	岩　手	北上市岩谷堂		2
20	薄衣	うすぎぬ	岩　手	東磐井	川崎村薄衣	30
21	歌津	うたつ	宮　城	本吉	歌津町	1
22	打越	うちこし	岩　手	陸前高田市矢作打越		1
23	うとう二木	うとうにき	岩　手	東磐井	増沢(十二木屋敷?)	2
24	午飼の山	うまかいのやま				1
25	上道	うわみち				3
26	大切	おおきり				3
27	太田原	おおたはら	栃木県	太田原市		1
28	大原浜	おおはらはま	宮　城	牡鹿郡	牡鹿町大原浜	1
29	大峰崎	おおみねざき				1
30	大持場	おおもちば				1
31	大森	おおもり	岩　手	東磐井	増沢(屋敷か)	4
32	奥玉	おくたま	岩　手	東磐井	千厩町奥玉	33
33	御崎	おさき	岩　手	本吉	本吉町小泉	2
34	小戸	おど	岩　手	東磐井	西口	1
35	小友平	おともだいら	岩　手	東磐井	千厩町	1
36	折壁	おりかべ	岩　手	東磐井	室根村折壁	4
37	加妻	かづま	岩　手	東磐井	薄衣	4
38	金山沢	かなやまざわ	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	3
39	釜谷	かまや	宮　城	桃生郡	河北町釜谷	1
40	上	かみ／うえ				9
41	神樟山	かみくすやま				1
42	上山	かみやま	岩　手	東磐井	砂子田	11
43	門崎	かんざき	岩　手	東磐井郡	川崎村門崎	1
44	金田	かんだ	岩　手	東磐井	千厩	1
45	神田	かんだ、かみた	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	2
46	北沢	きた(の)さわ	岩　手	東磐井	増沢、千厩	4
47	黄海	きのみ	岩　手	東磐井	藤沢町黄海	6
48	木六(黄麓)	きろく	岩　手	東磐井	千厩	1
49	金華山	きんかさん	宮　城	牡鹿郡	牡鹿町金華山	3
50	釘子	くぎこ	岩　手	東磐井	室根村釘子	3
51	九十村	くじゅうむら	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	3
52	椚山	くのぎやま	岩　手	東磐井	増沢	1
53	熊田倉	くまだぐら	岩　手	東磐井	千厩町熊田倉	1
54	下薗沢	げぞのざわ	岩　手	東磐井	増沢	1
55	小沢	こざ	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	5
56	腰寄(廻)明神	こしより(まわり)	岩　手	東磐井	増沢	1
57	誂石	こしらえいし	岩　手	東磐井	増沢	1
58	小菅	こすげ	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	1
59	小梨	こなしむら	岩　手	東磐井	千厩町小梨	1
60	小林	こばやし	岩　手	東磐井	増沢	6

61	小森下	こもりのした	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	1
62	衣川	ころもがわ	岩　手	胆沢	衣川村	2
63	幸ノ神	さいのかみ				1
64	幸神沢	さいのがみざわ	岩　手	東磐井	薄衣	1
65	嵯峨峯	さがみね				2
66	七十刈	しちじゅうがり	岩　手	東磐井	増沢	7
67	志のノ沢	しののさわ	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	1
68	下久手	しもきゅうて	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	1
69	下田	しもだ	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	3
70	下道	しもみち				4
71	十八里	じゅうはちり				1
72	十文字	じゅうもんじ	岩　手	東磐井	西口	1
73	上場	じょうば				1
74	新山	しんざん	岩　手	東磐井	千厩	1
75	水神沢	すいじんざわ	岩　手	東磐井	増沢	5
76	水神所	すいじんしょ	岩　手	東磐井	増沢	1
77	砂子田	すなごだ	岩　手	東磐井	砂子田	2
78	世田米	せたまい	岩　手	気仙	住田町世田米	1
79	千厩	せんまや	岩　手	東磐井	千厩町千厩	42
80	外山	そでやま	岩　手	東磐井	薄衣	2
81	台	だい	岩　手	東磐井	新沼	25
82	高田	たかだ	岩　手	陸前高田市高田		2
83	滝沢	たきざわ	岩　手	一関市滝沢		1
84	舘	たて	岩　手	東磐井	増沢	8
85	立石	たていし	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	3
86	舘ノ上	たてのうえ	岩　手	東磐井	増沢	1
87	田ノ神田	たのがみだ				5
88	田ノ崎沢	たのさきざわ				1
89	田淵墓前	たのふちはかまえ	岩　手	東磐井	増沢	1
90	田茂ノ沢	たものさわ	岩　手	東磐井	砂子田(屋敷)	3
91	中門下	ちゅうもんした				5
92	寺沢	てらさわ	岩　手	東磐井	千厩町	1
93	百目木	どうめき	岩　手	東磐井	新沼,砂子田(屋敷)	1
94	届石	とどけいし	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	3
95	泊浜	とまりはま	宮　城	本吉	歌津町	1
96	上田林	とんだばやし	岩　手	東磐井	増沢	1
97	中神（中上）	なかがみ	岩　手	東磐井	千厩	1
98	名懸丁	なかけちょう	宮　城	仙台市名懸丁		1
99	中高	なかだか				1
100	中ツ下	なかつした				1
101	長根	ながね	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	7
102	中ノ森	なかのもり	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	1
103	中森山	なかもりやま	岩　手	東磐井	増沢	1
104	七日町	なのかまち	岩　手	東磐井	黄海	1
105	成石	なるいし	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	9
106	濁沼	にごりぬま	岩　手	東磐井	千厩町濁沼	10
107	西口	にしぐち	岩　手	東磐井	藤沢町西口	11
108	西ノ端	にしのつま	岩　手	東磐井	増沢	1
109	日光	にっこう	栃木県	栃木県日光市		1
110	楡木	にれぎ	栃木県	宇都宮市		1
111	蓮田	はすだ				1
112	畑ノ沢	はたのさわ	岩　手	東磐井	増沢	1
113	馬場沢	ばばさわ	岩　手	東磐井	増沢	1
114	肥前大村御領彼杵郡松崎村	ひぜんおおむらごりょうそのきぐんまつざきむら	長　崎	大村市彼杵町		1
115	日当	ひなた	岩　手	東磐井	新沼(屋敷)	2
116	日当沢	ひなださわ				1
117	火ノ田	ひのた	岩　手	東磐井	砂子田	1
118	吹前	ふきまえ				2
119	藤沢	ふじさわ	岩　手	東磐井	藤沢町藤沢	11
120	二カ森	ふたがもり				1
121	豊後（国）	ぶんご	大分県			2
122	干場崎	ほしばざき	岩　手	東磐井	砂子田	1
123	細田	ほそだ	岩　手	東磐井	新沼	3
124	仏坂	ほとけざか	岩　手	東磐井	千厩町仏坂	4
125	洞	ほら	岩　手	東磐井	増沢(屋敷)	3

126	洞田	ほらだ	岩手	東磐井	増沢	1
127	洞前	ほらまえ	岩手	東磐井	増沢	3
128	保呂羽	ほろわ	岩手	東磐井	藤沢町保呂羽	2
129	米谷	まいや	宮城	登米	米谷町米谷	1
130	前木	まえぎ	宮城	気仙沼市新月		1
131	馬篭	まごめ	宮城	本吉	本吉町馬篭	1
132	増沢	ますざわ	岩手	東磐井	藤沢町増沢	9
133	松川	まつかわ	岩手	東磐井	東山町松川	2
134	神子沢	みこのさわ	岩手	東磐井	千厩	1
135	美作（国）	みまさか	岡山県			1
136	宮当	みやたり	岩手	東磐井	砂子田	1
137	狢森	むじなもり	岩手	東磐井	増沢	3
138	室根山	むろねさん	岩手	東磐井,気仙	千厩,室根,気仙沼市に跨る山	2
139	桃生	ものう	宮城	桃生	桃生町桃生	1
140	安場	やすば	岩手	東磐井	折壁	1
141	谷地	やち、やず	岩手	東磐井	増沢	4
142	谷地山	やちやま	岩手	東磐井	砂子田	3
143	柳ノ沢	やなぎのさわ	岩手	東磐井	薄衣	2
144	矢作之内二又	やはぎのうちふたまた	岩手	陸前高田市矢作		1
145	山ノ目	やまのめ	岩手	一関市山ノ目		11
146	横山	よこやま	宮城	本吉	津山町横山	1
147	六十里	ろくじゅうり	岩手	東磐井	西口	1
148	和子ノ峯	わごのみね	岩手	東磐井	西口白子	1
149	渡波	わたのは	宮城	石巻市渡波		1

注　「現所在地」欄の(屋敷)は、文化二年の「人数改帳」と「日記」の記載により補完。
　　「読みかた」は標準的なものに統一した。

整理した。一つは地名を現所在地と照合させ，それぞれの出現回数を計算すること，二つは一〇回以上言及されている地名を，俊治が居住している増沢村を中心におき，地図上（ここでは「磐井 ── 明治二三年輯製製版 ── 」〔二〇万分の一〕，陸軍陸地測量部『幕末明治日本国勢地図』柏書房，一九八三年）で確認することである。

まず，現所在地がわからない地名を総数から省き，現在の都道府県，郡市，町村，大字別に回数を計算してみよう。都道府県別では岩手県が大部分（一〇三回，八四％）をしめ，他は宮城県（一四，一一％），栃木県（三），大分，岡山，長崎県などである（総数一二三回）。郡市別では東磐井郡（九四回，七八％）が大多数で，本吉郡（五）が目につく程度，旧城下町仙台は一回登場するだけである（総数一二一回）。町村別では千厩（一四回）と藤沢（五），大字別では増沢（四二回，三九％）を中心に，砂子田（一〇），新沼（八），薄衣（五）などに分散した（総数一〇七回）。

次に，頻繁に（一〇回以上）言及された地名の現在の所在場所を，増沢を中心に東－西，南－北という方向軸で整理してみよう。東の方角には条件にあう場所（地名）がない。西の方角には薄衣（増沢より直線距離にして約一二km，三〇回）と山ノ目（一関の北方，陸羽街道沿いの集落。二二km，一一回）が所在する。北の方角には千厩（二km，四二回），濁沼（四km，一〇回），奥玉（八km，三三回）が，南の方角には上山＝砂子田（一km，一一回），台＝新沼（四km，二五回），藤沢（八km，一一回），西口（八km，一一回）が所在している。

これらを総合すると，旅行（七月二二日から二九日にかけての金華山参詣）や職務上の出張を除き，俊治とその関係者の日常的な生活・活動空間は，現在の岩手県東磐井郡旧増沢に隣接している千厩，砂子田，新沼など，半径一里（四km）以内の地域やムラにほぼ限定されていたと結論できる。

Ⅵ　家　業

文化二年の俊治の持高（銭高）は，先（Ⅲ-２）に記したように，「高四貫四百七文 外百七十

六文新田 外五百十五文新田砂子田村江入作」で合計五貫九八文あった。この年増沢の村高は五三貫六九五文，百姓前本地は五二貫八七四文であったから，俊治は後者の八・三％を所有していたことになる。なお「人数改帳」によると，この持高は一五年間，すなわち寛政一二年（一八〇〇）から文化一一年（一八一四）まで不変であった（翌一二年には一挙に二倍の一二貫文以上となり，明治初年に至る）。一貫文を単純に一町歩とすると約五町歩の手作り地主となるが，畑の換算面積から判断して，実際にはそれ以上の面積を所有していたと考えられる（仙台藩では一貫文を米十石と換算し，年貢は四石三斗と定めた。田畑はそれぞれ五等級に分けられ，一貫文当たり面積が定められたが，「高一貫文の田は五等平均して八反三畝二十歩，畑は四町八畝十歩」となる。宮城県史編纂委員会編『宮城県史２近世』宮城県史刊行会，一九六六年，一九三－一九四頁）。

東北あるいは奥羽地方は日本列島の広大な面積をしめ，南と北（例えば福島と青森）とで，また東と西（太平洋側と日本海側）とで，自然環境（気候，地形，植生，風土など）に大差がある。農業における地方差・地域差はいまも極めて大きい。しかし，この奥羽地方（特に奥州）の近世農業については，近畿・西南型のそれと比較して，例えば次のように概括されている。

「当時東北地方は水稲経営の北限地であり，技術的にも水田一毛作経営の確立さえ容易ではなかった。関西地方においてはすでに元禄の初め頃に水田二毛作が可能である時，東北地方においては水田一毛作が確立しうるか否かにあったところに，両地方の農業経営が類型視されるほどの経営差を生ずるに至ったと見られる。関西地方においては麦・藺・麻の水田裏作が行われ，四国では米の二毛作さえ行われており，関東地方においては寛政年中すでに群馬地方においてさえ田麦裏作が行われていた。しかるに東北地方においては水田一毛作の安定性が未だ問題であった」（森嘉兵衛『奥羽農業経営論』〔著作集第四巻〕法政大学出版局，一九八三年，五五－五六頁）。

ここでの森嘉兵衛の論点は，日本列島でかつて展開された近世農業を大きく西日本型と東日本型に分類し，東北農業を理念型として把握してその特殊性，劣弱性を強調することにあっただろう。そして，上記のような類型があることに異議を唱える余地は，今のところないように思われる。しかし，近世の東北農業と一口にいっても，微視的・地域的にみると，そうとも言い切れない事例もあったかにみえる。

ここでは，二つの視点から家業（農業作業）の内容を明らかにする。一つは「日記」に記載された農作業名の集計値からわかる事実を明らかにし，二つは一年間の農作業や山仕事のサイクルを「日記」から復元して，農業の全体像をとらえることである。

農作業の概念をひろげて「日記」に適用した場合，そこからは一二〇余の作業名を拾いあげることができる。稲と麦を中心とする栽培作物は多様であって，村肝入（手作り地主，豪農）の事例であり，かつ冷害の年ではなかったという点を考慮するとしても，ここから東北農業に対して森が示唆しているイメージを想起することはむずかしい（表３）。稲作にかかわる作業名は約三〇種，言及数は一一八回（総数三二六の三六％）あり，全体のなかで最も多い。田草取りや田植への言及が多いのは西日本と同様であろう。「米四駄千厩へ出ス」「飯後ニ勇五郎三治両人ニ而米二駄藤沢へ遣」（五月二〇，二三日）が，米の私的販売を意味しているのかどうかは，残念ながらわからない。

畑作物の種類は多く，麦（主穀）以外に，粟（雑穀），大小豆（豆類），大根（糧物），雪菜，葱，芹，牛蒡，胡麻（野菜），菊（花卉）が作られた。麦にかかわる作業名は多くはないが，言及数は三七回（一一％）ある。また，商業用として煙草栽培が重視され，工芸作物として楮，麻，

表３　「乙丑日記」農作業名リスト

番号	農作業(作物等)	名　称	出現回数
1	稲作	苗代	1
2	(米)	苗代打	2
3		苗代切返	1
4		苗代並(ならし)	1
5		畔上	1
6		畔塗	3
7		畔草刈	3
8		種(籾)洗	1
9		種上	1
10		田打	6
11		田打休	3
12		代撹	6
13		刈敷刈(揃)	7
14		早苗取	1
15		田植	10
16		ふませ	5
17		入草刈	2
18		田草取	20
19		籾挽	2
20		米搗	8
21		糯米搗	2
22		干草刈	3
23		稲上	5
24		稲刈	9
25		稲こき	5
26		稲こき手伝	2
27		種こき	1
28		米拵	2
29		するす拵	1
30		するす挽	3
31		臼挽	1
小計			118
32	畑作	麦蒔	6
33	(麦)	麦蒔手伝	1
34		麦切懸	7
35		麦刈	6
36		麦打	6
37		精麦搗	1
38		麦搗	7
39		小麦挽	2
40		麦合	1
小計			37
41	畑作	粟蒔	2
42	(粟)	粟踏	1
43		粟切懸	5
44		粟中抜	2
45		粟二番	3
46		粟刈	2
47		餅粟立切	1
48		粟こなし	2
小計			18
49	畑作	大豆種蒔	1
50	(大小豆)	大豆切懸	1
51		小豆のむくり	1
52		大豆草取	5
53		大豆打	1
54		大豆一斗上る	1
小計			10
55	畑作	煙草結	1
56	(煙草)	煙草(地)切懸	3
57		煙草畑に厩肥出	1
58		煙草苗代掘返	1
59		煙草俵仕	3
60		煙草俵仕極	1
61		煙草付	5
62		煙草植	4
63		煙草二番	2
64		煙草撹	3
65		煙草売	1
66		煙草畑返	1
67		煙草のし	2
68		煙草下	1
小計			29
69	畑作/工芸	楮畑へ厩肥出	1
70	(楮)	楮植立	1
71		楮伐り	1
72	(麻)	麻種蒔	1
73		麻引	1
74		麻貸付	1
75	(漆)	漆植立	1
76		漆直抓	2
77	(藺草)	藺植	2
小計			11
78	畑作/養蚕	蚕棚をかく	1
79	(桑・繭・藺)	桑取	5
80		桑摘	1
81		桑盗まれ	1
82		蚕ひき(る)	3
83		繭を売	1
小計			12
84	畑作	大根糧干	1
85	(大根)	大根蒔	2
86		大根畑堀	1
87		大根草取(切懸)	2
88		大根つみ	1
89		大根揃	1
90		大根洗	1
小計			9
91	畑作	雪菜植	1
92	(その他)	葱植替	1
93		根深佃代	1
94		芹佃代	1
95		牛蒡	1
96		胡麻葉引	1
97		菜園切	1
98		菊仮植	1
99		菊植替	1
100		菊本植	1
101		菊立直	1
102		菊見	2
小計			13
103	施肥作業	肥干し	1
104		肥出	2
105		肥付	5
106		肥背負	2
107		馬屋肥出	1
108		畑掘	2
109		いのこ起	1
小計			14

110	山仕事	柴刈	13
111		木伐	14
112		木運	1
小計			28
113	屋内外	萱付	2
114		萱切	1
115		長木仕廻り	1
116		木割	1
117		煤払	1
118		灰焼	1
119		馬改	1
120		馬売(買)	3
121		麹取寄	1
122		麹引	1
123		酒を造	2
124		酒振舞	1
125		味噌合	1
126		餅搗	1
127		餅振舞	2
128		餅まわし	1
129		草餅を搗	1
130		とろろ致	1
131		鰍(ドジョウ)払	1
132		雁を取	1
133		雁頭呉来	1
134		禽頼	1
小計			27
合計			319

藺，漆が栽培され養蚕もおこなわれていた。しかし，仙台藩の他領移出物資としては「米と海産物」があっただけとされているので（宮城県史編纂委員会編『前掲書』五一一－五一三，五四一頁），在方のこうした作物は領内消費向けに栽培されたのであろう。煙草にかかわる作業名は一四種，言及数は二九回と多い。煙草や藺を販売していたことは，例えば「去々年之分小葉煙草ヲ売」「松吉ニ手作煙草売」（八月三〇日，九月四日）や「田中の長作来　まゆを十六切ニ売」などからわかる。

施肥には厩肥とともに人糞も使用されただろう。馬耕の記載は残念ながらないが，馬喰を介して（乗馬用とも思われる）馬を売買している。主食は麦と米を中心としたであろうが，雑穀（粟）や豆類をふくむ主食構成はわからない。動物性蛋白源としてドジョウや家禽が食べられ，雁を捕獲したこともあったらしい。一一月下旬には酒（恐らく味噌も）を醸造し，休日などにはよく餅を搗いたようである。

この「日記」の資料的価値が高い理由は，ここから一年間の農作業の流れを復元できるからである。執筆者の一人千葉は，以前からこの「日記」の資料的価値に注目してきており，筆者も増沢村「農事暦」として整理し参考にしてきた（高木正朗「一九世紀東北日本の『死亡危機と出生力』」『社会経済史学』六一巻五号，一九九六年，二二－二五頁。高木正朗・森田潤司「飢餓と栄養供給 ── 一九世紀中期東北地方の一農村 ──」『日本研究』第一九集，一九九九年六月）。今回，共同作業によって原文解読をほぼ終了したので，以前の「農事暦」に修正を加え最終版を作成した（図１）。本図と表３とを併用することによって，この地域の農業のイメージはより豊かなものとなろう。

図によると，農業は一毛作で田畑は年に一度だけ利用されている。旧暦の三月中旬から一〇月までの八ヶ月間が農繁期である。主穀生産（稲作と麦作）と商品生産（煙草，養蚕など）を同時に進めなくてはならないので，この期間は大変繁忙だったと想像される。働き盛りの男子奉公人を五人，日雇いを三人抱え，彼らの仕事が克明に記録された理由はここにある。しかし，そうだからといって農繁期に休日がなかったわけではない。奉公人の方も病気などを理由に家に戻ったり，奉公人部屋で「伏し」たり「臥居」したりしている。一一月から三月上旬までの四ヶ月間は農閑期である。その間に山仕事（柴刈り，木伐り）や米搗き・臼挽きなどが行われた。

Ⅶ　旅行，娯楽，休日

庶民が旅にでることは，経済的にも難しいことであつただろう。そこで発達したのが「頼母子講」である。社寺参詣のための講としては伊勢参宮講，金毘羅参詣講，御崎参詣講，金華山参詣講などがあり，彼らは信仰と同時に物見遊山を兼ねて旅をした。伊勢参りの時期としては，秋の収獲終了から春の農事始めまでのいわゆる農閑期が選

表１　農事暦（増沢村，文化２［1805］年）

月 (旧暦)	旬	水田	畑			農作業（作物別）			山	気象・年中行事・休日
		米	麦	粟	大豆・小豆	煙草・楮・漆	麻・養蚕・藺	大根・葱・胡麻・菊 施肥	柴刈・木伐	
1月	上					9日 煙草結い				3日 金昌寺その他へ礼廻り
	中								10日 木伐り	6日 御年始に行く 9～10日道普請
	下								25日 柴刈り	21～28日(雪降り)
2月	上									1日(大風，雪)
	中					20日 煙草苗代掘返し		20日 大根糧干し	16日 木伐り	15日(晴,雨)
	下								22日 木伐り	28日(晴,昼夜風吹く)
3月	上	11日 田地境見分	5日 麦切かけ			5日 煙草地切かけ	7日 麻蒔き	23日 麻貸付に遣る	1～2萱付　3日萱運	8日(晴) 山境見分
	中	18～26日 苗代打, 畦上, 種洗, 畦塗り	8～12日 麦切かけ			7日煙草・楮畑へ厩肥出し・煙草付け			2, 13日 木伐り	15日(晴,風,夜中雪) 吉祥寺頼母子
	下	28～29日 田打ち				10・13日 煙草苗伏 29日 煙草俵作り		26日 葱植替え	22～23日 木伐り	12日 山境見分 27日(雨,晴) 苗代休み
4月	上	1～3, 9日 田打ち	5, 7日 麦切かけ 6～7日 粟蒔き			1日 煙草俵仕極め	9日 藺植え	5日 菜藺切り		2日(雨) 田打ち休み
	中	20～27日 代撹き	16日 麦切かけ			3日 煙草付け 9日 楮植立て		8～9日 菊仮植,植替え	17～18日木付,木運	15日(曇,雨)
	下	28～晦日 刈敷かり		29日 粟踏み	27日 大豆蒔き	26日 煙草付けに行く	24日 桑摘み			22日(雨) 虫送り 休日
5月	上	1～3日 刈敷かり　3～7日 ふませ		16日 粟切かけ仕廻り			4日 蚕棚をかく	4日 菊本植え		17日(晴) 休日　雷神精進
	中	8日 早苗取, 8～17田植え(10日惣仕廻り)		20, 23, 27日 粟切かけ			5日 桑を盗まれ	16日 胡麻蒔き		19日(雨から晴) 入梅,精進
	下	25～26日 入草刈り		28日 粟中抜き						21・22・24・28日(曇,小雨) 休日
6月	上	2～3 田草取り	4～10日 麦刈り	5日 粟中抜き	9日 大豆切かけ	4～6日 煙草植	4～8日 桑取り			1日(晴) 休日
	中	13～21日田草取り	23日 畑掘り			11日 煙草植	6, 8～9日 蚕(大)ひき			15日(時々曇) 休日
	下	22日 田草取り仕廻り	25～29日 麦打ち	25～27日 粟二番	19日 畑切かけ	28日 煙草切かけ	18日 藺16切売り			24日(晴) 土用 休日
7月	上		1日 麦打ち		11日 小豆むくり	3日 煙草切かけ, 肥つけ	2日 麻引き	3～4日 肥付(仕廻り)	4日大根蒔き	2日(晴) 病送り 7日 新沼村, 8日増沢村
	中		6, 9日 畑掘り		12～13日 大豆草取り	10, 13日 煙草二番		5日 大根畑掘り		麦取納め 15日 中元御礼出 16日 金昌
	下		12日 小麦挽き					19日 大根蒔き		寺参詣　26日(薄曇)
8月	上	4・6日 畦草刈り　7～16日 田草取り,籾挽き	2日 精麦搗き					14日 菊立直し, 肥出し		1日(晴) 休日
	中	14日 苗代切返し　16,17,24日 干草刈り	5日 麦搗き仕廻り			27日 漆御直抓き		17日 大根草取り	28～29日 肥付け	27日 両村組頭寄合い(不作見分)
	下	19日 焼米稲刈り	17日 麦搗手伝い		27日 大豆草取り	30日 煙草を売る		29日 大根草取,切かけ		22日 法事 28日 彼岸 晦日休日
閏8月	上	6日 干草刈り	5日 畑掘り	4, 9日 粟刈り	2～3日 大豆草取り	10日 煙草撹き	2日 藺植え			7日(雨) 病送り 休日, 8日 灰焼き
	中	13日 米搗, 14～27日 稲刈り	11～12日 畑掘り	23日 粟立切り		18日 漆御直抓き,植立て				15日(薄曇) 休日　小沢八幡宮で相撲
	下	23～25, 29日 稲上げ	28～29日 肥付け	24～25日 粟こなし		22～23日 煙草撹き				29日(薄曇) 千厩市に行く
9月	上	5日 稲上げ	2～10日 麦蒔	5日肥付け		4日 煙草売る 7日 煙草畑返し		5日 肥付け 11～12日菊見	16～17日 柴刈り	1日(晴) 休日
	中	13日 苗代打ち	6日 畑掘り 10日 麦蒔き仕廻り		14日 大豆打ち	16日 煙草俵仕に来る		23日 雪菜木元植え	19～晦日 木伐り	18日(大雨) 休ませ申し候
	下	22日 稲こき	13日 麦打ち 15日 麦蒔手伝い			24, 28日 煙草のし		いのこ起こし		29日(晴) 休日　晦日朝雪降る
10月	上	12日種こき 13日糯稲こき 15日 稲こき始め	7～8日 畑掘り			10日 煙草のし		2～4日 大根つみ,揃え,洗い		5日(晴) 午前餅振舞い　6日 朝大霜
	中	14, 24日 稲こき仕廻り 28, 30日 稲こき手伝い				21日 七日町へ煙草下げ				17日(晴)　風あり寒し
	下	26～27日 米拵　27～28日 するす挽　30日 米搗き				27日 楮伐り			25日 長木仕廻り	22日(朝霜)
11月	上	1～2日 米搗き							3～10日 柴刈り	1日(晴)，5日 馬売買
	中	19日 するす挽き							6日 木伐り	14～16日(風,雪) 甚だ寒し
	下	29日 米搗き							11～12, 28日 柴刈	22～25日嘉蔵酒造に来る, 25日頼母子
12月	上	8～9日 糯米搗き							11日 芹,葱佃代を払う	4日(曇) 夕方地震
	中	13～15日 米搗き	19日 小麦挽き			11日 下人二人,藤沢へ煙草付けに遣る		16日 肥出し	21日 柴刈り	12日 新沼村, 14日 増沢村籾取納め
	下	18日 引臼挽き								22日 煤拂
(1年=383日)										28日朝餅つき 29日使用人勘定，大雪

資料：「文化二年 乙丑日記」による。筆者は肝入俊治である。文化２年２月１日現在の俊治の世帯は，人頭俊治（数え年43歳），女房（41），男子４人（20，15，8，5），実父（66）の計７人からなる直系家族と，７人の下人（下男６人［37，36，30，22，20，16，13］と下女［13］，合計14人で構成されていた。農作業は主に下人が担当したと考えられる。この年の銭高は，本高4,407文，外高176文，他村入作515文で，合計5,098文あった。この時期の下人の年季は短くて２年，長い場合９年だった。

注）気象の欄，天気「吉」は「晴」と記した。

ばれ，八〇日から一〇〇日の往復日数を要した。例えば「日記」には，下野国太田原の町年寄から，隣村砂子田の久之助が伊勢参詣の帰路，楡木（宇都宮）で病死したとの書状を受け取っている（正月一四日）。御崎神社は本吉郡本吉町にあり二～三日で参詣できた。金華山参詣は一〇日ほどで可能だった。俊治も七月二二日に同道者三人と七泊八日の参詣に出発，往路は北上川の水運を使用，帰路は徒歩で太平洋岸を北上し，本吉郡歌津から馬篭（そして大篭，藤沢）をへて戻っている。安産祈願には地元の明神様にお詣りした。旅費のための講ばかりではなかっただろうが，「日記」に見られるように，俊治九回も頼母子に加わっていた。

文化一年（一八〇四），嗣子千世之助は二十歳の祝いとして伊勢参詣に出発，神宮大社を巡拝した。同行者は増沢村館屋敷の惣吉，新沼村沼入屋敷の善作，濁沼村新屋敷の新右衛門，千厩町の大吉，相馬で合流した濁沼村の孫作をふくむ五人で，五月一四日に立ち九月五日に下向（帰村）した（「千代之助満敬 文化元年甲子歳伊勢并大社巡拝餞別覚」岩山家文書）。

湯治が農閑期の庶民の楽しみであることは現在の東北農村でも変わらない。俊治は慰労のために湯治にでかけた（四月九日）。「親様方」も八月六日から一六日まで長期の湯治に行っている。この時俊治は下人二人に馬をひかせて一行を迎えにやっている。「釣り」は親様の楽しみだったらしい。この時（五月二二日）の釣場木六は千厩町の上，中，下木六のいずれかだったであろう。勧進相撲，神社奉納相撲，歌舞伎などは庶民の遊堕につながるとし前年まで禁止されていたが，この年に解禁された。この解禁について，俊治は「両村［増沢村 新沼村］組頭寄合申し渡…［中略］…勧進角力御免候事」（八月二七日）と記している。庶民の期待や楽しみは大変なものであったと思われる。自分も遠方（保呂羽村）や近隣での角力興行（八月一九日，閏八月一五日，九月二二日）に行ったり，それに言及したりしている。

法事を娯楽に含めることは正しくないかもしれないが，庶民の楽しみでもあったことは容易に察しがつく。「日記」には，八月二二日に営んだ自家のものをふくめ，一八回の法事が記録されている。うち七回は明らかに親類や別家の法事であるが，それ以外は五人組（葬式組）や縁者の法事であったろう。時期としては農作業が一段落した一〇月（八回）と八月（四回）が選ばれている。出席者が判明するのは八回で，たいていは俊治だった。しかし夫婦で，あるいは嗣子千代之助と出席した場合もあり，千代之助が「名代」として遣わされる場合（二回）もあった。

九月には菊の観賞ができるように，四月から八月にかけて育成に注意が払われた。主に千代之助が面倒をみたようで，この年は九月一一日に「当屋敷菊見」，翌日（休日）には「昆幸并泉長元理［親類の昆野屋，商人の泉屋長蔵，医者の元理老］抔菊見ニ来」と記されている。その他『加賀騒動記』を読んだり，武家から『海国兵談』三冊を借りたりすること，「千厩市」へ行くこと（一一回）なども楽しみの一つだったようだ。

百姓の休日としては寛保二年（一七四二）制定の規則がある。下記は，宝暦一二年（一七六二）に一層詳細化されたものである（「百姓遊日御定書書立人頭壱人壱枚宛ツゝ相渡家江張置可申事」千厩町白石家文書）。

正　月　朔日ゟ十日迄，十四日ゟ十六目迄，二十日，二十四日，二十五日　合十六日
二　月　朔日，五日，八日，十五日，社日，初午，仲日，二十四日　合八日
三　月　朔日，五日　合二日
四　月　朔日，八日，田打休手休五日　合七日
五　月　五日，二十四日，田打伏三日　合五日
六　月　朔日，十五日，十六日，二十四日，虫送り日二日　合六日

七　月　七日，十四日ゟ十六日迄，二百十日　合五日
八　月　朔日，十五日，社日，中日　合四日
九　月　九日，十五日，二十四日，晦日　合四日
十　月　朔日　合一日
十一月　無休日
十二月　無休日
都合休日日数五十八日，外其所鎮守日等休日

これによると，休日は年間二ケ月を目安として定められていたことがわかる。なお，文化二年〔一八〇五〕の通達では七九～八〇日間を「百姓休日」と定めていた（宮城県史編纂委員会編『宮城県史31史料編Ⅱ』宮城県史刊行会，一九六二年，二〇六－二〇七頁）。

むすび

ここでは，一九世紀初頭に肝入がつけた「乙丑日記」の解読・掲載に先立ち，まず仙台藩の地方制度を担った大肝入，肝入の位置や役割を検討した。続いて筆者の家（イエ）の歴史をたどり，「日記」本文から読み取ることができる事実（登場人物，地名，家業，娯楽など）を整理・分析して，若干の解説と考察をくわえた。その結果，簡潔な文章でつけられた日記であるが，一年間をカヴァーしている点が幸いして，豊富な情報をえることができた。近世末期の東北に生きた農民たちの暮らしや感情が，ムラの最上層に属する一人物の目を通してではあるが，実にリアルに伝わってくるので，われわれはあたかも彼らとともに生きている思いすらするのである。なるほど農作物の生産高や金額，消費物資の数量などはわからないが，生活の土台をなした農業・農作業の様子が克明にわかることもこの資料の特徴である。社会科学的な数量データに血肉を与え，それを賦活する役割をもつ「日記」の価値をここで強調したとしても，決して強調しすぎとは言えないであろう。

なお，分析し残した項目（天候，貸金，手間替え，冠婚葬祭，病気など）については，今後の検討課題としたい。

「乙丑日記」本文

「日記」は縦横15.5×14センチメートル，上端部を紙縒で綴じており，恐らく携帯したものでろう。総枚数は三九で，末尾七枚は覚書きに充てられている。文中の□□は未解読部分を，［ ］は解読者の補足を示している。余白一字分は句読点に代わるもので，読みやすさを意図したものである。本文は，当然のことだが，縦書きである。従って，数字はすべて和数字に統一した。なお，仙台藩独自の文字（茨，抔）は現代の文字（煙草，稼）に変えた。また，ゟを「より」とするなど，若干の読み下しをした。

［表紙（蓋）］

［覚え］
休　日
正月　元日より八日迄　十一日　十六日より十八日迄　廿日
二月　一日　二日　八日ホマチ［帆待］テンケ　十五日　廿日　中日　社月
三月　三日送物　十六日苗代休　二十七日
四月　二日田打休　八日　二十二日虫送　二十七日刈敷仕

拾両包寸法　縦二寸二分×横六分×厚四分
琇　　瑩
タマノナ　カガヤク
五月女　男三百二十文　苗取三百文　女二百八十文　日雇頭へ祝儀五百文　鍬頭三百文　並二百文　子共［供］二十文

［本文］
正　　月
元日　天気吉
二日　天気吉　暖風也
三日　天気吉　些薄曇　夜中より雨
　予金昌寺より田ノ茂沢　上山方礼廻り
四日　終日雨　暮方ニ晴
　舘へ行　松栄来
五日　天気吉
　活全［金昌寺］方丈御出
六日　天気吉　明方ニ少々雪降
　松川へ御年始ニ行　市左エ門清太夫連ル　歩夫吉太郎
七日　天気吉
　新沼両屋敷へ御礼ニ行
八日　薄曇　風少々在寒
九日　天気吉　夜中雪少々降
　朝より十文字内道拵　いの吉来稼　飯後ニ利左エ門煙草結ニ来
十日　天気吉　些風在
　朝昨日仕懸之道普請　飯後木伐　予千厩へ行
十一日　天気吉
十二日　天気吉
十三日　天気吉
　予奥玉へ行
十四日　天気吉
　奥玉より帰ル　源内へ筆五封小三ツ二ツ誂ル　御丸代三百文遣　栄蔵来　火ノ田与右エ門子共久之助伊勢参り下向　日光道中楡木ニ而病気　太田原ニ而病死　同所年寄中より書状到来ニ付吟味返事等認遣
十五日　天気悉吉
　昼より夜中迄室根山焼ル
十六日　天気吉　暖気也　些薄曇ニ昼より成南風ニ成　夜中より雨　明方雪
　吉太郎三次内へ行泊
十七日　朝より雪　七ツ頃より天気ニ成
　細田仲作二十五年重　母様并千代之助行　母様御泊　三治吉太郎帰ル
　暮方以之外寒
十八日　天気吉　甚寒
　予千家之助様御出ニ付台へ行
十九日　雪降　風烈
　千世之助ヲ加妻ニ礼ニ遣
二十日　雪吹降
　予高田之祭へ行　下矢作打越　作之助方ニ泊
二十一日　風在折々雪降
　高田神明御祭礼諸見　同所泊
二十二日　天気吉
　奥玉長作惣七同道ニ而十八里へ行
　同所泊　薄衣茂吉も同宿
二十三日　天気吉些風在
　矢作之内二又庄松方ニ泊
二十四日　小雪降風在
　室根越大難儀致候　奥玉ニ泊
二十五日　薄曇風強
　朝帰ル　谷地ニ而柴刈
二十六日　同断　雪少々降　昼より晴
　官蔵様御年始ニ御出
二十七日　少々天気吉
二十八日　朝より雪　大雪也　風茂在
　奥玉長作来
二十九日　薄曇
　千厩市へ行　官蔵様御同道長作も帰ル　千賀之助様御振舞　御肴調

二　月

朔日　明方雪　夫より四ツ過迄天気吉　昼より大風ニ而雪降
官蔵様御同道衣川より行　夜半過ニ着
二日　天気吉風在寒
三日　同断
四日　天気吉些暖風也
五日　同断
衣川出立　山ノ目泊
六日　同断
暮過ニ帰宅　豊後の六部来
七日　雪降寒し
八日　雪少々降　風在寒
由松妻年重
九日　些暖也
十日　風在て寒し
十一日　天気吉
舘の年重　予下田伊惣次六十二の賀へ被呼行　新右エ門来
十二日　天気吉些風在
奥玉祖母様御病死
十三日　天気吉些風在少々雪降
館の惣吉婚礼　奥玉葬礼へ親様御出
十四日　天気吉少々風在
栄助栄吉千代ノ助抔幸神沢へ行　親様奥玉より御帰り
十五日　朝天気吉　四ツ過より雨ニ成　八ツ過より晴
朝親様新屋へ御出　おとりも帰ル　豊後の六部七兵衛朝立石へ連行　飯後ニ是も新屋へ行
十六日　天気吉風烈ニ寒
木伐　折壁ノ四郎治来
十七日　天気悉吉
奥玉へ悔ニ行
十八日　ひがん　朝曇　飯後より雨　暮過より尚強　夜中晴
運蔵来泊　昼過ニ養助丑太郎方より頼ま連奥玉へ行
十九日　天気吉風在
三治ヲ薄衣へ遣　加妻へハ払責付　円治へ紫七尺誂　尤染賃三貫二百文迄取合半切一貫五百文遣　利作事親年重ニ付里へ行
二十日　天気悉吉　疱瘡遊
薄衣お屋寿帰ル　大根糧干　松太郎由松屏風張ニ来ル　薄衣弥太郎栄之助へ母払侘之儀内々而申遣　伊右太へ持替縄百尋伊之吉ニ頼遣　利作夕飯過帰ル
吉太郎ハ稼　煙草苗代堀返し　丑太郎病死
二十一日　中日　朝大霜　昼天気悉吉
馬改致候事　松太郎屏風張ニ来
二十二日　薄曇　暮過より雨
木伐　松太郎屏風張ニ来　朝薄衣ノ外山火事類焼一軒
二十三日　前夜より雨四ツ頃より晴
屏風張ニ致事　円治来
二十四日　社日　天気吉　昼過より南ニ成　夜中風強
幸助ニ馬ヲ為牽弥惣助へ遣　戻ルニ本けヲ付寄ル　吉太郎婚礼ニ付内へ行　石ノ脇長蔵百目木又太郎喧嘩内済寺申受
二十五日　天気吉風烈
昆野屋甚兵衛方法事ニ千代之助ヲ遣予暮時文太夫頼母子へ行　長四郎と予ト二本持一切宛　樽ヲ又も左膳様へさし上ル
二十六日　前夜も風烈　今日も尚不止
国分和助殿御越　薄衣長太郎来泊ル　勇五郎濁沼より寺沢利助方へ遣　長蔵文太郎免ス　金昌寺御出
二十七日　薄曇七ツ頃雨少々降　夜中ニも降
新山市左エ門方ニ法事在候　名代ちよの助遣　長太郎帰ル　吉祥寺年始ニ御出暮方予田茂沢へ酒振舞ニ行
二十八日　天気吉昼夜風強
二十九日　天気吉
結納遣　休セ候事　仏坂へ利作ヲ遣
晦日　天気吉
本まちてんけ

三　月

朔日　天気吉
萱付　藤沢弥右エ門　保呂羽茂兵衛来

二日　天気悉吉
朝萱付　昼木伐　国分和助殿帰　予金昌寺迄同道おとり帰ル
三日　薄曇
金昌御隠居御日始ニ御出　朝円治来
四日　薄曇已ニ雨降らんトスルもよう也
成石の婚礼ス　台様へ大豆壱石一斗仲四郎ニ上ル
五日　天気悉吉
麦煙草地切懸　奥玉伯父様御出
六日　曇
弥三郎萱六十里より運ブ　新沼の御普請見分　伯父様御帰親様も御一道
七日　曇　暮過少々雨降
馬屋肥煙草畑楮畑へ出　新助麻蒔　おつや伊之吉来　朝田茂ノ沢より作四郎煙草付ニ来五俵持行　届石之権右エ門小森下上場ノ所道拵之事ニ付来ル　釘子ノ七兵衛方より煙草拾二ノ俵来ル　親様御帰
八日　天気吉風在
石倉沢より始誂石辺迄山境見分文右エ門立合　麦切懸
九日　朝大霜　昼天気吉風少々在寒
麦切かけ　岩倉沢田地山境見分栄助龍蔵立合
十日　朝曇　飯時頃より雨　暮過ニ晴
送物　水神所煙草苗伏
十一日　天気吉風在　宵ニ雨少々降　夜中大風
麦切かけ　田地境見分立合文右エ門中森山より上田林分見終ル　七十刈頼母子洞庄右エ門利右エ門さしに成庄右エ門コサレ申ス也
十二日　天気吉
麦切懸　利作塩受取　昼前養助ヲ山見分ニ連ル　山境見分昼過迄ニ仕廻　小林分長根の山落境形杭指ヲ立
十三日　薄曇　昼過より雨少々降夜中も降
木伐　伊ノ吉稼　幸助ハ桶打　入ノ煙草苗伏
十四日　飯後迄雨　昼も折々降　曇
御蓑作　浪士二人来とめる
十五日　天気吉然し風在て寒し七ツ頃霰降　夜中雪少々降
浪士酒ヲ持参　藤兵衛京吉来　吉祥寺頼母子
十六日　天気吉
休日　判形　小戸 岩船岸宗仙来
十七日　朝大霜　天気吉
予台へ行　夫より宮当頼母子へ行　二十二日ニノビル
十八日　朝霜　天気吉
苗代打　畔塗　大花ヲイケル　新宮手代武田五右エ門泊
十九日　天気吉
畔上　種ヲ上ル　安兵衛来
二十日　天気吉
同
二十一日　天気吉
二十二日　四ツ頃より雨
木伐ニ出　雨ニ付御蓑作　利作ヲ薄衣へ手伝ニ遣
二十三日　天気吉風在
木伐　朝薄衣へ麻貸付ニ孝助利作三次ヲ遣　又利作ヲ押返縄ヲ遣　味噌合千世之助清右エ門方へ手伝
二十四日　天気吉些風在
苗代並し　宗仙老御立　千世之助薄衣へ遣
二十五日　天気吉
畔塗　幸助ハ九十村へ手伝　種洗　外山大焼
二十六日　昼前天気吉　昼過より小雨降　夜中雪降
葱ヲ植替　昼前畔塗　昼過壱貫森山へ行　幸助九十村へ手伝　利作ハ嵯峨峯へ手伝
二十七日　朝雨強　五ツ過より晴折々ハ小雨降
苗代休　昼過官蔵様御出　沼倉卯左エ門清太夫仲四郎来
二十八日　天気吉　田打　予濁沼へ行　母様薄衣へ御出
二十九日　天気吉　田打　煙草俵仕　元理老御出

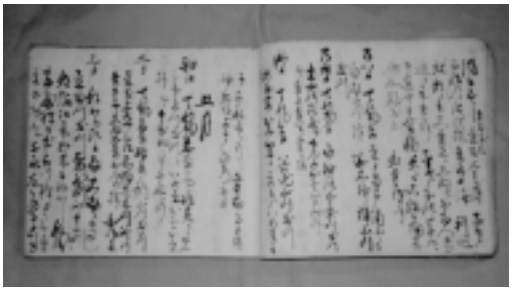
四　月

朔日　朝より小雨　夜中雨強
飯後迄喜太郎臥居　家同士ニ而田打仕廻

煙草俵仕極　予千代之助円治大持場へ
松堀ニ行　母様御帰り
二日　朝より小雨　暮方雨強
田打休　喜太郎養助二人ハ上へ田打ニ行
予大肝入衆ヲ御本役御悦ニ行泊
新宮初尾［初穂］金一切丸三百五十五文
金右エ門妻ニ頼帰ル
三日　小雨　昼過より少々吉され共時々降
喜太郎養助田打休伏　ほまち煙草付　新
助利作三次勇五郎朝より煙草付
孝助吉太郎館の田打ニ行　栄蔵安兵衛来
四日　天気吉　暮過雷声在　白雨在
昼両度少々これ在　予千代之助甚作一周
忌法事へ行　人数帳引合
五日　天気吉
麦切懸　予菜薗切　柳ノ沢藤七来　千世
之助中高へ行　おとりヲ濁沼へ遣
六日　天気吉　朝霜
成石 入ノ洞　粟蒔　暮過千世之助帰　養
助病気ニ而不参　舘よりとよ来稼
七日　天気吉　朝少々雨在　飯後刻地震風在些
寒　昼過尚尚寒
小林麦切かけ　粟蒔　利作昼上ふ致小林
ニ臥居　幸助昼過ニ不起臥居　養助不参
おみの来稼
八日　天気吉
菊仮植　雁夥敷帰ル
九日　天気吉　昼過より少々曇　暮時より雨
喜太郎利作長根へ　幸助吉太郎狢森へ田
打ニ行　朝之内万四郎上山へ御手伝新助
ハ引返手伝　上山土蔵屋根葺　予千世之
助菊植替　藺植　うとふ二木裏へ楮植立
親様并右馬吉奥玉へ行　上金屋より世田
米　三之助ヲ湯治の誘ニおこす　養助不参
十日　終日雨　夜中尚強
予千厩市へ行
十一日　天気吉
小梨屋根葺共来　二十束裏蔵へ取付
千厩御会所ニ而御条目　千厩 釘子 砂子
田増沢 新沼 西口 黄海 薄衣 門崎 松川
濁沼 仏坂 合十二村也
昆野屋茂兵衛妻田中より呼取
十二日　朝霜悉深　天気大ニ吉なり
蔵屋根出　親様奥玉より御帰　薄衣円
治手伝ニ来　飯後より養助来稼真似致候
十三日　朝曇　昼天気吉　昼過曇
小座敷屋根出　運蔵抔来　下田ニ持置
候青毛馬売　養助同断
十四日　天気悉吉
厩屋根替　飯後ニ神子沢弥太郎倅来金
五両貸遣　昼過ニとよヲ肴取ニ遣　久
吉方江鮪五百文刻申候　二連八百文都
合一貫三百文代遣　養助同断
十五日　朝曇　飯後ニ雨降　無間茂晴　曇居
暮方より雨
厩屋根出　養助同断　暮過吉兵衛幸左
エ門赴行候　幸左エ門庇ヲ為屓
十六日　曇　五ツ時過より小雨降　悉暑　八ツ
過より晴　夜中より些涼
麦切かけ　昼過より為休申候　餅振舞
三治ヲ濁沼へ遣　おとり来　前夜吉
兵衛幸左エ門喧嘩　養助同断
十七日　薄曇
谷地山より木付　朝吉兵衛幸左エ門一
件ニ付組頭中ヲ寄ル　予雑費方書き出
之儀ニ付千厩へ行
十八日　明方地震　天気吉
谷地山より木付　昼過より家の近所の
木もはこぶ　吉兵衛大善院［村鎮守熊
野社別当］方へ翔入同院并与太郎来ル
十九日　天気吉
小切　肥干　昼とろろ致申候　おとり
濁沼へ行
二十日　天気悉吉　代撹吉兵衛ヲ免ス
二十一日　曇　タバコ過［午前一〇時頃］より
雨
大森 田ノ神田 中門下代撹　千代之助
ヲサカミ子［嵯峨峯］并清右エ門太
郎平金右エ門方へ悦ニ遣　養助ふ参
二十二日　雨
虫送休日　予千家之助様御出ニ付朝
台へ行　暮時ニ帰ル
二十三日　前夜より終日風強　天気吉
干場崎 入ノ沢代撹　飯後より源次来
稼　養助タバコ過より来肥干　利作
ハ病気ニ而臥　暮方ニ三次内へ遣

万吉新六源三郎三人連　仲作頼母子之儀ニ付来

二十四日　天気吉　昼より曇
肥干　代撹　狢森ノ代撹へ新助幸助吉太郎行　源治大吉稼　予田茂ノ沢へ行帰り桑摘　昼過石ノ脇ノ養水樋の事ニ付見分ニ行　上山ノ饗振舞



二十五日　雨模様　昼より雨降
肥背負　吉太郎いの吉稼　昼辰巳ノ方ニ雷声遠く聞ユ

二十六日　天気吉　西ニ雷声在て少々雨降
肥背負　勇五郎千厩へ煙草付行直ニ金田ノ利作宅へ返し利作病気の事為申聞ル御郡部奉行引地正左エ門様大原御出立　室根山御懸越千厩御泊ニ付同所へ御継娘伺ニ罷出　舘ノ上ノ饗振舞　朝智教院来

二十七日　天気吉然し折々ハ曇　風在寒し　昼雷声在　昼前大豆蒔　喜太郎三治入ノ沢代撹　昼過より休　利作親朝ニ来　又昼過ニ夫婦并外両人連ニ而迎ニ来連行　勇五郎小沢へ薬取ニ遣　途中より食腸虫ニ而大腹痛鼻血抔夥敷出　朝吉兵衛ヲ呼

二十八日　天気吉　昼より雷声南北ニ在　白雨少々降
成石 神樟山刈敷刈

二十九日　天気吉
水神沢 二カ森刈敷刈　金山沢左蔵并下久手おふかおさん稼　予昼過麦合粟ヲ踏

晦日　天気吉
谷地山刈敷刈　新助妻おみのおふか吉太郎いの吉来稼　予千厩市へ行幸助方より詫ニ神教坊与太郎孫右エ門来候由

五　月

朔日　天気悉吉　昼ニ酷暑也
うとふ二木迄刈敷刈　いの吉おふかおみの稼　予書出し物ニ付千厩へ行

二日　天気悉吉　酷暑也
椚山刈敷刈　昼前養助三治雁頭呉来　刈残ヲ刈　吉太郎夫婦大吉おみの稼　円治来

三日　朝五ツ頃より雨　大雨ニ而ハなし　暮方地震
昼前刈敷刈　昼過よりふませ致候　朝浪江来二朱一枚かし　飯後ニ官蔵様御出衣川様より申し被遣候条の金二切上ル　千厩藤兵衛方より貸金三切ノ丸代二百文入遣シ受取　この夜草餅ヲつく　朝喜太郎臥居

四日　天気吉　朝地震在
上道 下道 中門下ふませ　長根の親子三人狢森親子両人おふかおみの来稼　菊本植蚕棚ヲかき申候

五日　天気悉吉　長根のふませニ家内中無残行

六日　天気吉　昼日ニ眩暈在　前夜桑ヲ被盗申候　北沢 中門下 洞前 入ノ沢ふませ

七日　天気悉吉　谷地 大森 田ノ神田 水神沢 下道ふませ

八日　天気吉
早苗取　洞前 谷地 水神沢 大森田植　予夫婦薄衣の法事へ行

九日　天気吉
中門下 上道 下道田植

十日　天気吉　田植惣仕廻

十一日　朝より飯後迄曇　昼より照上ル
由松方ノ田植ニ　親様御不到ニ付元理老ヲ呼

十二日　朝余程冷　天気吉少々風在　昼より雲出　昼過少斗雨降　ふる程也　北ハ降候様見得申候筭上山ノ田植　予金昌寺隠居金華山へ四月中御継ニ付御悦ニ行

十三日　天気悉吉　些風在　冷方　昼過より南ニ成　月に暈在

上ノ田植　昼過千代之助藤沢へ精進膳ヲ持行

十四日　朝より曇雨　辰巳ニ成　南ニ成　昼過少々雨降　土のしめる程の事ニ而もなし　長根の田植

十五日　朝より晴　明五ツ時頃少々の地震　天気悉吉
館の田植

十六日　朝日ニ小暈在　夫より曇　暮過より雨降　格別の大雨も無寔ニ結構成雨也小林粟の切懸昼前仕廻　昼過胡麻葉引蒔　養助雄五郎成石へ手伝　新助ハ七十刈へ手伝　美作の女六部来泊

十七日　明半頃より雨晴　天気悉吉　休日
保満田植ル　七十刈田植　千世之助手伝ニ行　女六部立　雷神精進

十八日　朝より曇　九ツ時頃より雨降　夜中降通ス
千世之助始女共石津台へ行　本組頭中寄合申し渡し諸吟味事致　且幸ノ助手分之儀茂吟味致候事　休日

十九日　朝も雨四ツ頃より晴　休日　入梅
七十刈桃行祝儀

二十日　天気吉
成石の粟切懸　米四駄千厩へ出ス　予千厩市へ行

二十一日　朝より曇　昼八ツ頃より雨
草隠明　送物　休日　利作来

二十二日　朝より飯後迄雨　四ツ頃より晴　休日
予幸之助一件ニ付白東［白石東左衛門］へ取合ニ行　源内へ御駕籠奉手立御聞判物書き出誂置　親様方千厩木六へ釣ニ御出

二十三日　薄曇　昼過尚曇多
北沢粟の切懸　残より入ノ洞粟切懸　小森作左エ門手伝ニ来　飯後ニ勇五郎三治両人ニ而米二駄藤沢へ遣

二十四日　終日雨降　休日

二十五日　終日雨　夜四ツ時頃地震　暮方之雨一層強なる　夫より晴
入草刈　喜太郎新助三治勇五郎刈敷刈揃

二十六日　曇　昼頃天気吉　昼過又曇
新右エ門夫婦来　釘子貞右エ門来
米ヲ払　入草刈　昼過より休　草右廿駄致し申し候

二十七日　時々小雨　入ノ洞 墓ノ前粟切懸　薄衣惣作来　金五切貸し渡

二十八日　曇　昼より小雨　昼過より晴
粟中抜　円治来泊

二十九日　曇折々小雨　休日
田中長作ノ衣川へ指上候分金一切借リ　米助被頼遣　茶半切分調呉候様二朱一枚相入利作ニ頼遣

六　月

朔日　天気吉　休日
新沼組頭中雑費料ノ儀ニ付寄合致候　金昌寺隠居様御出

二日　天気悉吉　夜五ツ時頃地震
洞前田ノ草取　吉太郎三治伊之吉同道ニ而　御崎参詣　養助ハ妻病気之由ニ而不参飯後ニ円治帰ル

三日　終日曇　北東風ニ而寒　暮過ニ小雨降寒　遠雷声在
北沢田ノ草取　七ツ下りニ御崎参戻　養助ふ参　おつやかか粟取ニ来　予小沢へ手伝ニ行　昼過ニ雄五郎藤沢へ錐買ニ遣

四日　終日曇
煙草地麦刈　昼過より煙草植　おツや桑取　おとよ手伝ニ来

五日　天気吉
粟中抜　昼過煙草植　おつや朝より桑取ニ来

六日　天気吉
入ノ麦刈　昼過煙草植　朝桶屋治平来
官蔵様へ幟御用立遣ス　御夫仲蔵　おつや桑取　頭蚕ひき申し候　飯後より養助来稼

七日　天気吉
あたこひら［愛宕平］辺麦刈　いの吉稼　おつや桑取　おげんおとよ手伝ニ来暮方折壁座頭来

八日　天気吉　昼過より東風のやうニ成
大切辺麦刈　おつや桑取　蚕三四十枚ひ

きる
九日　天気吉
大切大豆切懸　小沢親子手伝ニ来　蚕大ひき　薄衣長右エ門来泊　いの吉稼
十日　薄曇　昼過より雨
麦刈　予も昼前刈　昼過田茂ノ沢へ行　千世之助飯後ニ源助処ニ行昼過ニ帰　喜太郎嘉吉ハ麦刈致候処引込臥居　昼飯も喰　夫より何方へ参候や居合不申
十一日　前夜より雨　昼より晴
煙草植　予岩下へ同組寄合ニ付行　上金屋ニ而継伯母引取以親様御出
十二日　天気吉　休日
肥前大村御領彼杵郡松崎村政吉来泊　折壁座頭帰ル
十三日　天気悉吉
田ノ草取　おとり腰寄明神へ参詣　新助ヲ遣　親様奥玉より御帰り
十四日　天気吉　昼過より小雨
田ノ草取　前夜より喜太郎吉太郎不居　予丹左エ門様へ罷出ル
十五日　天気吉　然し折々曇　休日
十六日　天気吉
田の草取　喜太郎昼過帰候由ニ而内ノ者共詫申し聞候間　人主口入共ニ尤致俱ニ頼候て吟味可致申渡　夜半過ニ万四郎引揃願申しニ付免ス
十七日　天気吉
田の草取　いの吉おみの稼
十八日　天気吉
田ノ神田 大森辺迄田の草取　いの吉源治稼　田中の長作来　まゆを十六切ニ売
十九日　天気吉　飯後ニハ少シ雨降るかぞゆる程也
端畑切懸　昼過ニ官蔵様白元御連御出　おみの稼　田ノ草取
二十日　曇　昼頃より少々雨降　夜半頃より些強
田の草取　予千厩へ行　御代官石田軍内様この日御下ニ付御継娘伺ニ出 源治来稼
二十一日　明方より明半頃迄雨強　飯後より晴　休日
長根ノ吉太郎親子三人来稼　喜太郎茂稼水神沢田ノ草取　千世之助山ノ目へ行
二十二日　天気吉　前夜より些冷
田ノ草取仕廻　大吉おみの稼
二十三日　薄曇　少ハ照候時も在　昼より東風ニ成ル
畑堀　細田ノ吉太郎へ中神ノ養吉娘奥玉長作妻ニ咄呉候様申遣　奥玉長作へ養吉娘貰候様申遣　伊之吉ニ日手間代五百文甚右エ門ニ渡遣
二十四日　土用　天気吉　休日
幸助吉太郎昼過ニ家へ行　吉太郎翌飯後ニ帰り　幸助ハ昼頃ニ帰ル　金昌寺隠居御出　円治来
二十五日　飯後ニ少々雨降
粟二番　上より初麦打始止　昼ニ退休　隠居様御帰り　薄衣加兵衛来
二十六日　天気悉吉
粟二番　上ノ麦打　昼過雄五郎濁沼へ行　千厩ニ泊　翌昼帰ル　おつや稼
二十七日　天気悉吉　粟二番　上山麦打　おつや稼
二十八日　天気悉吉　入ノ洞煙草切懸　善作惣吉大吉孫作等寄合　御精進
二十九日　同断
麦打　予駒口御〆切并償御聞判取　千厩へ行

七　月
一日　同断（天気悉吉）
舘ノ麦打　浪江細工手伝来　千世ノ助ヲ千厩へ遣　源内へ水野様三切伊東様へ六切酒代角五百文遣　巨銭相図　昼蚊屋切一丈鬢付三本頼　此分ニ二朱と丸六百文遣親様方熊田倉へ御出
二日　天気悉吉　病送休日
おつやおふか麻引
三日　朝五ツ時地震　天気悉吉
肥付　新助抔ハ煙草切懸　長作源内来同人に償方八切丸二百三十文并白石隼太様返済二切仲作へ頼遣
四日　天気悉吉　朝迄肥付仕廻　大根蒔　朝幸ノ助并親類孫右エ門組頭助太郎引添以来

諸進取次不罷成返申断
五日　天気悉吉
西ノ端大根畑堀　昼過南の方雷声在　雨も降候様見ゆる　浪江来　三浦林七来
六日　天気吉　四ツ頃より西ニ雷声在　筭程雨降　東へ廻ル
畑掘　林七大原へ行
七日　些雲多　昼頃少々雨降　露の程也
新沼麦取納
八日　天気吉　雷神精進休日
薄衣駕籠同刻申し来出候　増沢麦取納
九日　天気吉
畑掘　御代官石田軍内様黄海通御登仙ニ付昼より御案内ニ出　当村御備麦納三浦林七立
十日　天気吉
煙草二番　予千厩市へ行　御郡方横目熊谷甚助様千厩へ御着
十一日　朝雲多　飯後より天気吉　カツサ昼麦搗　利作昼前稼　昼過より臥　千世ノ助抔小林小豆のむくり　熊谷治左エ門来
十二日　天気吉
大豆草取　幸助養助千世ノ助小麦挽　熊谷治左エ門立　薄衣辺迄少々雨降候由
十三日　天気吉
大豆草取　煙草二番等致候事
十四日　天気吉　夜薄曇
十五日　明方小雨降　朝ハ雨降らんとする模様也　朝□□麦搗　飯後より悉吉　予朝御横目熊谷甚助様へ中元ノ御礼ニ出　松印同道
十六日　天気吉　飯後ニ台ニ行　夫より直ニ金昌寺へ参詣華会致候事
十七日　天気吉
鉄砲判形治右エ門同道ニ而行　朝蓮ヲすル　母様薄衣へ御出
十八日　朝大曇　飯後より天気ニ成　昼過刻雨一度降
昼麦つき　諸上納延滞之者共在之　九ツ頃京吉参也
十九日　天気吉　然し折々曇　昼頃少々雨降
夫よりハ薄曇　暮過ニ又降　大根蒔上ノ夜麦つき　京吉帰
二十日　曇　飯後ニ々雨降　夜半過より雷雨
吉祥寺頼母子　浪江幸蔵さしに成分ル　四本目華三百文新沼作右エ門取　三本目華一貫孫右エ門取　母様御帰
二十一日　明方之雨甚強　飯後より晴　休日
二十二日　些薄曇
金華山へ行　栄蔵藤蔵源助同道　横山泊
二十三日　雨暮方尚強後吉　桃生の辺ハ曇，折々雷雨降　石巻より雨ニ逢　渡波泊夜中雷雨
二十四日　天気吉然し雲多　辰巳風也
金華山泊
二十五日　天気吉
御山をかけ　大原浜泊　送物
二十六日　薄曇
釜谷泊
二十七日　折々小雨
歌津の泊濱泊　夜中より雨
二十八日　朝雨　飯後より晴　馬篭泊　八泊ヲ取越　休日
二十九日　曇　帰宅

八　月
一日　天気悉吉　休日
二日　天気吉
精麦つき　千代ノ助おとり山ノ目へ行　予金昌寺より日当卯右エ門へ悦ニ行
三日　天気吉　四ツ時頃少々雨降　二百十日ヲ取越休日　瀧沢ノ獅子舞来　予吉祥寺幸ノ助 山境見分ニ行　奥玉長作来
四日　薄曇
畔草刈　長作へかや切禮銭金四切渡
五日　天気悉吉　朝麦つき仕廻　千代ノ助杯薄衣へ泊帰　長作も帰　昼畔草刈
六日　天気吉　畔草刈　親様方湯治へ御出立　石井友蔵来
七日　薄曇雨折々降　田ノ草取　金昌方丈御悦ニ御出　台より籾挽二人申遣
八日　折々雨降
田の草取　台より籾挽き　伊ノ吉三平来

吉祥寺山の取合之儀ニ付安右エ門来
九日　天気吉
田ノ草取　吉祥寺法印御出　楮狩高麗三様御出　薄衣丈右エ門妻病死
十日　天気吉　此日より酷暑也
田ノ草取　予西口和子ノ峯甚左エ門辺へよりニ出火致候ニ付大肝入名代ニ行大浦半ノ助様御出指示　駒蔵様御帰　勇五郎ハ薄衣の不幸へ遣
十一日　天気吉　昼雨少々降
田の草取　予西口より帰ル　台へ行
十二日　天気吉
田ノ草取　予千厩へ行
十三日　天気吉　悉大暑　昼雷雨一度降　夫より曇　夜中大雨
田の草取　予薄衣へ悔ニ行
十四日　朝雨　飯後曇折々雨降　終日日を不許　夜中も降
喜太郎新助吉太郎幸助朝より肥出　利作三治田ノ草取　昼過苗代切返
十五日　天気悉吉　昼過雷声はなく候処一度大雨　夫より曇
予台ニ御法事ありて行
十六日　天気悉吉
新助幸助吉太郎田ノ草取　喜太郎ハ草刈　親様方入湯より御帰　迎馬ニハ利作三治
十七日　天気吉
幸助吉太郎利作干草刈　外ハ大根草取　朝喜太郎おつる　舘へ麦つき手伝ニ遣
十八日　終日雨降
萩灑明　予藤沢市へ行　加賀屋へ悦　高橋へ悔　幸助吉太郎稼　外二百二日ヲ遊
十九日　曇
新助ハ米つき　喜太郎利作杯ハ焼米稲刈　保呂羽ニ角力在り行
二十日　折々小雨
予千厩市へ行　吉太郎ヲ西磐井へ遣　焼米つき　三治ハ濁沼薄衣へ使ニ遣
二十一日　曇
二十二日　曇
法事致候
二十三日　曇折々日ヲ見ル
上山ノ法事
二十四日　天気吉
干草刈　予折壁安場へ悔ニ行　雄五郎ヲ届石ノ悔ニ遣
二十五日　終日雨降
草刈　予金昌寺へ行　台へ頼母子仲七取
二十六日　曇折々雨　少斗日ヲ見つけ在
金昌寺快盤和尚二十七回忌法事在
二十七日　終日曇　七ツ時頃地震　夫より西風ニ成
大豆草取　朝つきヲ植ル　両村［増沢村 新沼村］組頭寄合申し渡　漆御直抓并ニ漆植立　勧進角力御免候事　並松植立　諸色納物無延滞様不作見分之事　七カ年夫償御座御小広間御建方御材木加馬　御雇代割方申し渡
二十八日　天気吉　社日　彼岸ニ成
二十九日　天気吉　暮過より雨
大根草取切懸
三十日　前夜より雨　昼過より晴　休日
卯右エ門殿来　去々年之分小葉煙草ヲ売

閏　八　月
一日　朝曇　飯後ニ雨降　四ツ過より晴
新沼内惣毛　親様奥玉へ御出
二日　薄曇
大豆草取　喜太郎三治蘭植　増沢内見　新助内へ行　金昌方丈御出
三日　天気吉
大豆草取　新助内へ行　喜太郎病気　増沢内見　日当沢より始下薗沢 馬場沢下田 九十村 志のノ沢 立石 畑沢 金山沢前ニ而仕廻
四日　天気吉　夜半頃より雨
粟刈　増沢内見　蓮田より始　中ノ森 小菅 田ノ崎沢ニ而惣仕廻
五日　前夜より終日雨降
成石畑堀

六日　終日雨降　夜九ツ時頃地震余程強
　　干草刈
七日　終日雨降　病送休日
八日　明方少々雨降　夫より天気吉
　　灰焼
九日　天気吉
　　粟刈　千葉作右エ門方への酒樽一ツ　善蔵方へ三治ニ遣
十日　天気吉
　　煙草撹　予神田の仲四郎親子不和合申の事ニ付取持ニ行　台ニ泊
十一日　朝より小雨降　飯時頃些強　昼過ニハ晴
　　小林迄畑堀　予昼手作返歩刈　泉屋長蔵来
十二日　終日雨降　夜も降通申候　入ノ洞畑堀
十三日　雨降　昼より晴
　　新助吉太郎養助三治米搗　幸助ハするす拵　喜太郎利作病気　暮方柳ノ沢勇蔵来
十四日　天気吉　入ノ沢 中門下稲刈　予御代官様御下ニ付千厩へ行　給処同役共不揃ニ付空戻　千代ノ助菊諸々立直
十五日　終日薄曇　夜中より雨降　休日
　　北ノ沢八幡宮で相撲在　予千厩へ行
　　暮過千厩より帰ル
十六日　昼夜引通雨降　風在　稲刈ニ極立候処風雨強刈兼候由ニ付為遊候事　予神田へ行台の屋敷ニ泊
十七日　四ツ頃迄雨降　夫より晴　朝五ツ時并七ツ時少々地震
　　稲田辺稲刈
十八日　朝曇少々雨降　夫より天気吉　風在
　　下道辺稲刈　漆御直抓ニ付飯沢優治様西口より御取移御抓子十六人
十九日　天気吉
　　稲刈
二十日　前夜より雨降　五ツ過より晴　曇折々小雨降
　　御内惣毛様千厩御出立　当村御見分
　　西口御昼黄海御泊　被仰渡候処雨天ニ付延ル　優治様藤沢へ御取移　上道稲刈
二十一日　天気吉
　　稲刈　御内惣毛様御廻村　増沢村皆無強ニ付減高致候様被仰含　西口御昼所罷出減高申上ル
二十二日　天気吉
　　煙草撹　予奥玉の紙ヲ纏
二十三日　薄曇
　　昼前煙草撹　昼過稲上　もち粟立切ニ致候事
二十四日　朝霜　昼天気吉　夜雨降
　　粟こなし　稲上　予岩倉ノ田地見分ニ行　台ニ泊
二十五日　昼天気吉
　　稲上　午飼の山神別当山伏二人来泊　幸助病気　無拠内へ連行　おより粟こなし
二十六日　朝大霜　昼天気吉
　　洞田稲刈　吉太郎不快
二十七日　天気吉
　　田ノ神田 北沢 谷地稲刈　いの吉おみの来稼
二十八日　天気吉　暮方雨模様ニ成ル肥付
二十九日　薄曇勝
　　肥付　稲上　予千厩市へ行　養助病気

九　月

一日　天気吉　昼九ツ時地震　休日ニ為致申候
二日　天気吉
　　入ノ洞麦蒔　予も蒔　千世ノ助は西口へ状夫
三日　天気吉
　　成石麦蒔　御代官様御横目様御郡司様御案内ニ千厩御出立　黄海へ御取移立石長根ノ烽火ニ於連申ニ付　幸ノ神辺御案内　予七ツ時台へ行　加賀騒動記ヲ読泊
四日　天気吉　昼過少々千厩辺より室根辺迄村雨強降
　　御郡奉行林弥平様米谷御出立　黄海御昼　千厩御泊　予官蔵様御同道黄海良善院へ行　夫より御案内　松吉ニ手作煙草売　暮過幸助来
五日　天気吉
　　田淵 墓前麦蒔　養助吉太郎利作肥付　昼

過田ノ神田稲上　長松来
六日　些曇
墓前より畑堀　新助妻稼　予屏風張　浪江漆ヲ持来
七日　朝大霜　天気吉
煙草畑返　麦蒔　前木ノ馬鹿者来　岩谷堂馬喰来
青毛馬二疋売買致申候　官蔵様御出　神樂ノ御誘被成下候処不参
八日　天気吉
麦蒔き　吉太郎伊ノ吉おかねおけん手伝ニ来　予藤沢へ大肝入名代文五郎見分ニ行
九日　天気吉
予参詣帰左膳様と立花見ニ行　台ニ泊速帰ル　おとり来
十日　天気吉
水神沢ノ愛宕平　大切麦蒔仕廻　吉太郎伊ノ吉手伝　源治来稼　塩渡
十一日　天気吉　夜中少々雨降　源次稼　当屋敷菊見
十二日　天気吉　休日
昆幸并泉長元理抔菊見ニ来
十三日　天気悉吉
□□麦打　苗代打　おみの稼　予昼過ニ台へ行　善蔵来　奥玉ニ法事遣
予細田へ長作妻仲人之事ニ而行　台ニよる
十四日　天気吉　然し折々小雨降　暮方より大雨
大豆打　十三俵取ル　おみの稼　御早石并御備石之儀ニ付組頭中ヲ呼
十五日　天気悉吉　昼大風雨在
新助ハ七十刈へ麦蒔手伝　利作成石へ遣　奥玉長作妻小酒取遣　御代官様并渡辺又右エ門様藤沢へ御出立　千厩へ御引返　千世ノ助奥玉より戻ル
十六日　天気吉　日当 愛宕山柴切　藤沢衆煙草俵仕ニ来　予奥玉行泊
十七日　朝曇　昼より雨
柴刈　予奥玉より帰　直々千厩ニ而御代官様へ出　喜太郎手ヲ伐　膏薬調ニ千厩へ行一所ニ戻ル
十八日　朝より五ツ時過迄大雨　為休申事　又七ツ頃より雨降　夜中晴大風
十九日　天気吉　風在寒
木伐　予周斎ト山ノ目へ行　千世ノ助小沢へ　養助不参
二十日　天気吉　風在寒
木伐　予山ノ目より帰ル　千世ノ助小沢へ　奥玉伯父様暮方ニ御出　養助不来
二十二日　天気吉　風少々在
新沼一村相寄諸御用申し渡　馬代金三切　上山文右エ門へ渡　稲こき昼過養助不参　高舘角カヲ迎る
二十三日　天気吉　暮過より雨
木伐　養助飯後より来　新助ハ雪菜きもと植　いのこ起こし
二十四日　前夜より終日雨降　タバコのし　暮方より晴　風
増沢村相寄諸御用申し渡
二十五日　天気吉
木伐
二十六日　天気吉　夜雨降
木伐　円融寺ニ大般若ありて行　かかヤ［加賀屋］ニ泊
二十七日　天気吉　夜中雨
新沼御普請所見分
二十八日　終日雨
煙草のし
二十九日　天気吉　休日
三十日　朝雪降　木伐

十　月
一日　風在て甚寒　台の御刈上へ行泊
二日　天気吉
大根つみ　台ニ逗留
三日　終日雨降
大根揃　洞ノ庄右エ門方法事　三治千厩濁沼 奥玉へ餅まわし奥玉ニ泊　養助上へ手伝
四日　明方ニ晴曇
利作西口へ状夫　増沢触流三治新沼へ触流　養助ハおつるニ被頼奥玉へ行　松太郎方法事　喜太郎上ニ　吉太郎病気　新助幸助大根洗
五日　天気吉

午前餅振舞　奥玉伯母様御出
六日　朝大霜　天気吉
左膳様御刈上
七日　朝霜　天気吉
畑堀　及川勘右エ門へ花夷返　商方二巻
并万国図一枚中華図一枚ロシアの呈書和
解一通勇五郎ニ遣
八日　天気吉
畑堀　七十刈法事　奥玉伯母様御帰
九日　天気吉
入上山法事
十日　天気吉
煙草のし　予千厩市へ行　届石法事　畑
ノ沢勇蔵来泊　浪士二人来泊
十一日　天気吉
官蔵様へ行
十二日　天気吉
種こき　官蔵様御出　沼倉も来
十三日　天気吉
糯稲こき
十四日　天気吉
稲こき仕廻　俵八ツ出ル　荒屋ニ法事
在親様御出　おみの稼
十五日　天気吉
稲こき始　薄衣嘉平来　おみの稼
十六日　天気吉　然し少々曇　昼過ぎ些時雨在
籾吹前俵十　洞ノ義右エ門方法事予行
千厩久吉来
十七日　天気吉　風在寒　雪華散
おみの稼　義右エ門娘ヲ西口へ嫁ス
予行　山ノ目より荷鞍来
十八日　天気吉　些暖風也
おみの稼　予栄蔵方へ悔ニ行
十九日　天気吉　夜中雨降
おみの伊ノ吉稼　暮過田茂沢へ行　山
ノ目より飛脚来
二十日　四ツ過より折々時雨在
おみの稼　山ノ目飛脚帰金二切遣　予
千厩市へ行　泳三様方より海国兵談三
冊借ル
二十一日　天気吉
利作三次七日町へ煙草下　源治いの
吉稼　山ノ目より又々専吉ヲ金取ニ
遣千世ノ助台へ行
二十二日　朝霜　曇　昼過より雨ニ成
おみの手伝い　源治伊ノ吉新助妻稼
山ノ目専吉帰ル　千厩久吉来金十
切かし遣　尤同人ニ仲八方へ禽頼遣
二十三日　終日曇　昼過少雨降
新助妻手伝　源次稼　吹前へ伊ノ吉
手伝　親様大峯崎夜へ御出
二十四日　天気吉　暮方曇少々雨降
稲こき仕廻　伊ノ吉来稼　源治稼　大
肝入衆源内京吉被召連　吉祥寺幸之助
論所山御見分ニ御出　山ノ目久五郎来
二十五日　天気吉
喜太郎新助養助抔長木仕廻　幸助吉
太郎利作上ノ手伝　三治ハ触書状夫
加妻ニ法事在　母様と勇五郎遣　上
父薄衣へ　千厩与右エ門来　張山様
台より御出
二十六日　天気悉吉
米拵　朝予利助方へ行　　円治来
上山庭仕廻振廻［舞］
二十七日　曇朝より雨
米拵　するすひき　庭仕廻ノ振舞致
候事　利助楮伐
二十八日　天気吉　夜中風在　雪少々降
吉太郎昼前するすひき　新助内へ行
喜太郎幸助鯲払　昼石かつき源次
来養助利作成石へ稲こき手伝　与右
エ門来泊
二十九日　曇　小雪降
養助洗濯除遣　吉太郎ハ市左エ門方
へ手伝　新助砂子田へ触書　喜太郎
利作幸助木割　奥玉婚礼千代ノ助行
予台へ行
三十日　雪降
喜太郎新助吉太郎米搗　幸助利作由松
方へ稲こき手伝　予千厩市へ行

十一　月

一日　天気吉
米搗　親様奥玉へ御出　千代ノ助ハ帰ル
二日　天気吉
米搗　予仏坂へおあき容子見聞ニ行　千

家之助様市之助様官蔵様御出御泊
三日　天気吉
愛宕平柴刈　予小友平法事へ行
四日　天気吉
愛宕平柴刈　官蔵様御当番ニ御出立　親様奥玉より御帰　加妻嘉兵衛金二切かし遣
五日　曇大風吹
岩谷堂惣次郎来　親様方馬売買　柴刈
三治ヲ仏坂へ容子聞ニ遣
六日　曇
柴刈　木伐　予薄衣御本石所へ行　濁沼茂左エ門来也
七日　薄曇　少々雨降
柴刈　吉祥寺法印御出
八日　天気吉風在
明方新屋よりおとり手道具帰ル　予台へ行
九日　天気吉
柴刈　利作洗濯ニ行　朝衣川檀那様方御出御泊　アミカサ浪士来
十日　天気吉　夜中少々雨降　夜半頃地震
柴刈　三治洗濯ニ遣
十一日　天気吉
柴刈　七十刈頼母子　夜中よりお国腰付
十二日　天気吉些寒
柴刈　予白東様方へ葬式へ行
十三日　天気吉　寒シ　夜中雷声在　八ツ頃安産
養助妻病気ニ付内へ行
十四日　風在雪降甚寒
吉太郎洗濯ニ遣
十五日　雪少々降　夜中甚寒
予薄衣御駒場へ行
十六日　天気吉　少々雪降
十七日　天気吉　小寒
薄衣御駒場御売仕廻　夜中戻ル
十八日　天気吉　折々小雪降
昼過予田ノ崎へ振廻　藤沢より麹取寄ル
十九日　天気吉
妻麹引　幸助勇五郎スルス挽
二十日　天気吉　暖気也
予市へ行
二十一日　朝雨　飯後より天気ニ成
予御代官様へ罷出　千代ノ助薄衣へ遣
二十二日　飯後迄雪降　夫より吉　善蔵来酒ヲ造
二十三日　天気吉
吉太郎来
二十四日　天気吉
予千厩へ行　治三雁ヲ取　松印同道帰リ内へ寄
二十五日　天気悉吉　夜中より雨
善蔵来酒ヲ造　予台の頼母子ニ行
二十六日　前夜より飯時頃迄雨　夫より晴　天気吉　昼より風立　暮時降吹夜中も大風松印雀取ニ来
二十七日　大風
千家之助様方御出　□□風烈故船通用不致　外山様等御泊之由　石越善蔵大工来
二十八日　曇
入ノ沢柴刈　予台へ行　御徳方御越に付
二十九日　天気吉風在
米搗
三十日　雪降風在　夜中雪尚強

十二　月
一日　風在寒
予食傷虫ニ而難儀
二日　大風
夜中幸蔵辰ノ助養助ニ付詫ニ来
三日　曇
おつる当年分切米之儀ニ付惣吉惣太来
四日　曇　暮時地震
御名懸丁富倉能登手代来泊
五日　曇　雪少々降
六日　折々曇雪少々降
七日　天気吉　然し風在て寒し
すへ上山へ泊ニ行　三次西口へ遣
八日　折々曇　雪少々降　暮過風甚強
惣五郎来　おとりを昆野屋へく連候　吉太郎利作糯米搗
九日　朝より寒
日中ニも半氷　吉太郎利作糯米搗　三治

ヲ西口へ遣
十日　朝寒　昼ハ少々吉
予御〆切并諸償御聞判取ニ行　円治来泊
十一日　薄曇
吉太郎大原へ遣　利作三治煙草付藤沢へ遣　高麗三様御出　円治帰ル　牛芳之代丸二百文并芹根深［葱］佃代ニ丸百文渡遣
十二日　天気吉
新沼籾取納欠石之作左エ門蔵へ入
十三日　天気吉
米搗
十四日　天気吉　昼より少々雨降
増沢籾取納　金山沢治左エ門蔵へ入
米搗久ノ助手伝
十五日　天気吉
米搗
十六日　薄曇　夜中些雪降　冬中の大雪也
肥出　白石小四郎様御出
十七日　正月七日　朝より引続昼迄雪降
十八日　風在て身ニ染寒し
千葉作方へ三治ヲ遣　引臼挽
十九日　朝風在て甚寒し　日中にも半氷
小麦挽
二十日　天気吉
予千厩市へ行
二十一日　天気吉風在
柴刈　喜太郎内へ行　利作ニ為送ル
二十二日　天気吉
煤払　官蔵様御下
二十三日　飯後より暮過迄雨余程強
予昼過ニ官蔵様へ行
二十四日　朝五ツ時地震　天気吉
おとりヲ昆野屋へ遣
二十五日　天気吉
二十六日　天気吉
喜太郎来ル
二十七日　天気吉
予［千厩］市へ行
二十八日　曇　昼より天気ニ成ル
朝餅つき
二十九日　前夜より雨　飯後より雪ニ成　夜中大雪　東海甚荒ル
千　秋　万　歳
［以上］

〔追記〕本稿をまとめる過程で，下記の皆さんから多くの援助・協力をえた。記して感謝の意としたい。岩山赳夫氏（岩山家当主，資料閲覧・情報提供），石田末男氏（藤沢町文化財保護委員，資料解読），向田飛鳥氏（古文書研究家，資料解読）。執筆は千葉がⅠ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅶ節を，高木が序文と結論，およびⅣ，Ⅴ，Ⅵ節を分担した。「日記」本文は向田氏の解読原稿をもとに，千葉と高木とが協議しながら作成した。